大分県立埋蔵文化財センター

研究紀要

6

豊後高田市志手金比羅山古墳
出土のトンボ玉について　服部真和

大分県の古墳時代鉄鏃(1)
－ 小迫２号墓出土鉄鏃の検討 －　西　貴史

願成院の密教仏画総覧 1　綿貫俊一

埋蔵文化財センター年報（令和３年度）

埋蔵文化財センター要覧

埋蔵文化財センター開館5周年式典

子ども学芸員体験事業 2021 発表会　in 能楽堂

目次

豊後高田市志手金毘羅山古墳出土のトンボ玉について
服部真和　1

大分県の古墳時代鉄鏃（１）
－小迫２号墓出土鉄鏃の検討－　西　貴史　25

願成院の密教仏画総覧 1
綿貫俊一　35

埋蔵文化財センター概要（令和３年度）　63

埋蔵文化財センター要覧　76

豊後高田市志手金毘羅山古墳出土のトンボ玉について

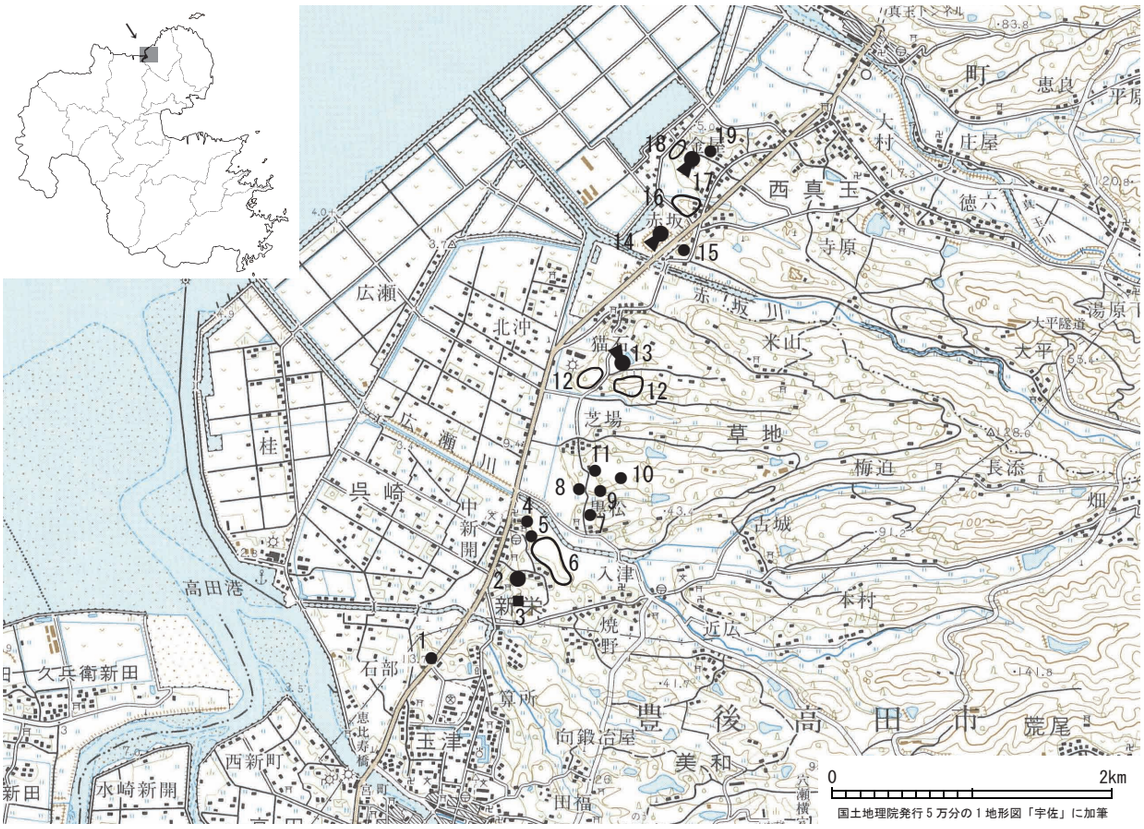
服部真和

はじめに

志手金毘羅山古墳は、大分県豊後高田市玉津字鼻先に位置する径約15mの円墳である。1975（昭和50）年に発掘調査が行われ、調査成果はいくつかの文献で紹介されてきたが、出土遺物の図面や写真は紹介されることなく半世紀近い年月が過ぎた。志手金毘羅山古墳の特色として、出土遺物の特殊性があげられるが、その中の一つにトンボ玉がある。この古墳からトンボ玉が出土したことは早い段階から紹介されていた（渋谷1977・真野1976）が、大分県で唯一のトンボ玉出土事例であり、一基の古墳からの出土数が日本最多を誇るにもかかわらず、これまでのトンボ玉研究で取り上げられることはなかった。今回、資料の重要性に鑑み、十分とはいえないがトンボ玉をはじめとした出土遺物を紹介することで、資料を所蔵する責を果たしたい。

志手金毘羅山古墳の立地（第1図）

豊後高田市は古代の豊前国と豊後国との境界に接した、国東半島の西の根元に位置する。河川と谷によって隔てられた多くの段丘は海岸部まで至り、段丘先端に平坦面を形成する。豊後高田市内のこうした段丘先端には前方後円墳や大型円墳などの有力首長墓や小規模古墳群が築造されているが、志手金毘羅山古墳はその西端に位置する。



1. 志手金毘羅山古墳　2. 入津原丸山古墳　3. 大原古墳　4. 権現山１号墳　5. 権現山２号墳　6. イド山古墳群　7. 鑑堂古墳　8. 笹原古墳　9. 二つ塚古墳　10. 草地金毘羅山古墳　11. 地蔵堂古墳　12. 花仕切古墳群　13. 猫石丸山古墳　14. 野内古墳　15. 野内２号墳　16. 和田鼻古墳群　17. 真玉大塚古墳　18. 下ノ山石棺群　19. 小塚古墳

第1図　志手金毘羅山古墳と周辺の遺跡（1/50,000）

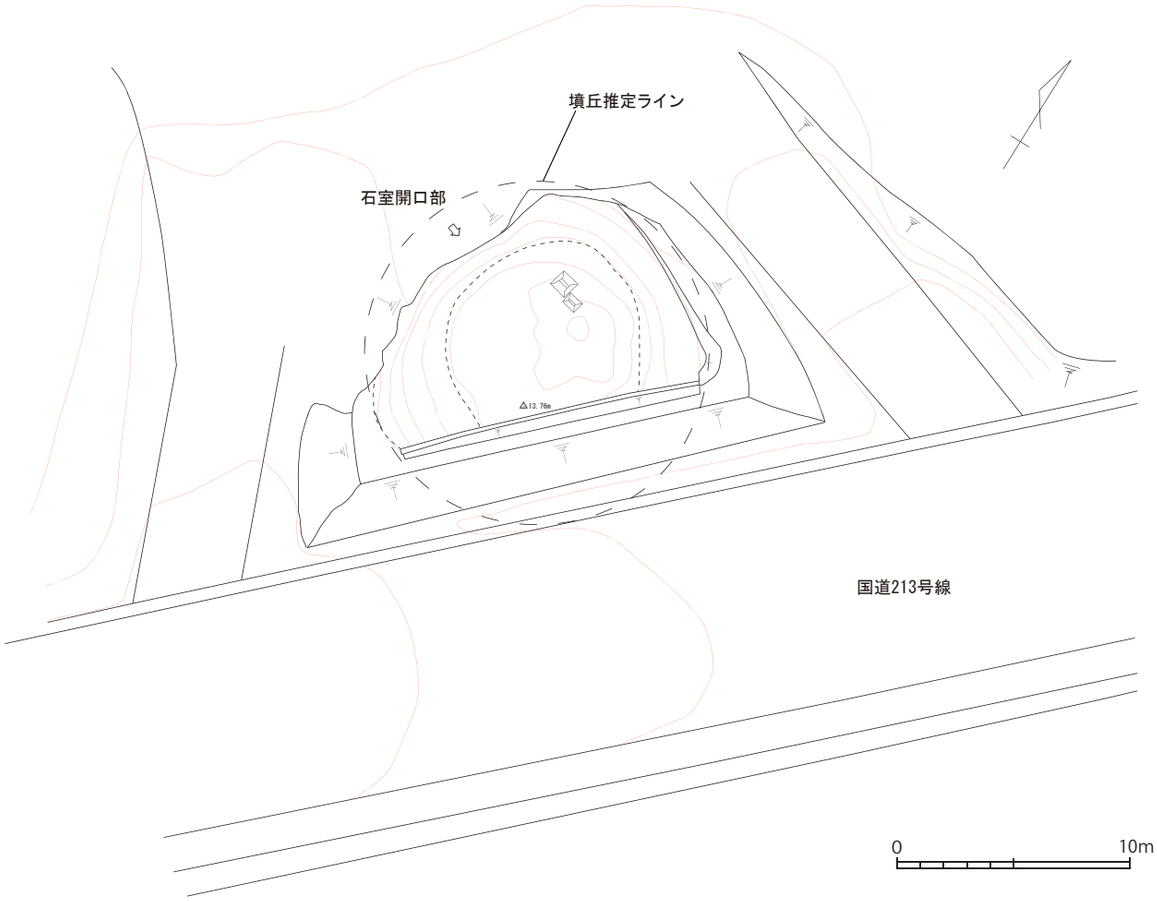
志手金毘羅山古墳の調査経緯

志手金毘羅山古墳は戦前からすでに知られており、発掘が行われたこと、石室（原文では石棺とある）が地下に残されていることが紹介（久多羅儀1925・河野1932・十時1940）されている。1963（昭和38）年、国道213号線の開通により墳丘南東部が削平を受けたものの、測量の起点となる三角点が古墳頂部に設置されていたため、墳丘の大部分は残された。しかし1975（昭和50）年に墳丘西側で採土が行われ、その際に横穴式石室が露出したため急遽大分県教育委員会と豊後高田市教育委員会により調査が実施されることとなった。調査は9月16日から9月23日に石室を、12月3日から12月11日に墳丘・石室の外部構造の調査が短期間で行われた。発掘調査には地元の方々や大分県立高田高等学校の先生・生徒が参加したようである（岩野1976・1980）。

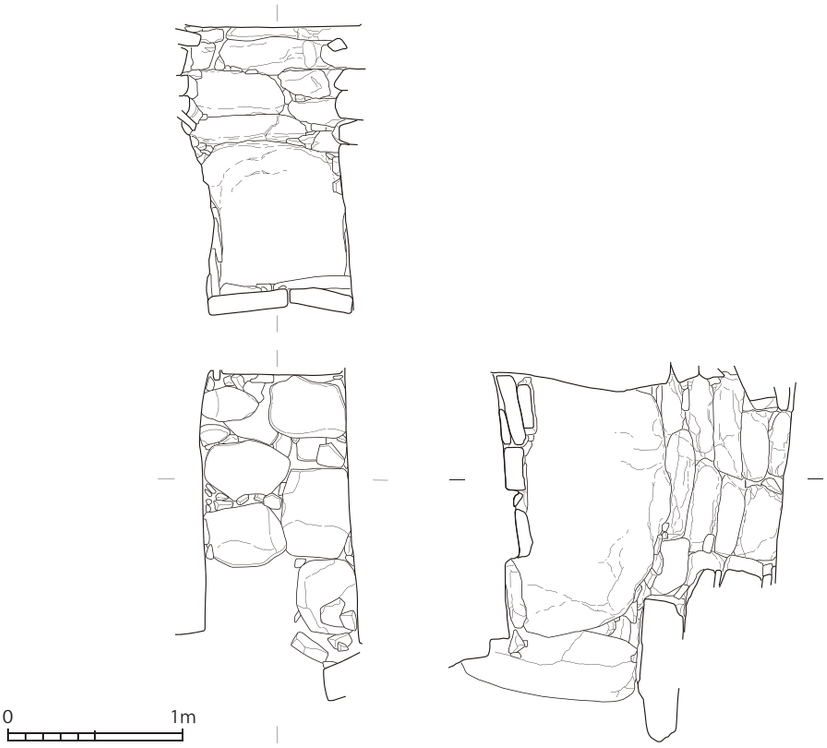
ちなみに志手金毘羅山古墳は現在でも国道213号線沿いに残っており（写真24）、石室の一部とみられる石材と墳丘頂部に祀られていた祠は豊後高田市立高田中学校の校庭隅に移設されている（写真23・註1）。しかしこうした状況も決して周知されているとはいえず、徐々に忘れ去られつつある。

墳丘・横穴式石室について（第2図・第3図）

墳丘は径約15mの円墳に復元されている。玄室は墳丘の中心から外れた墳丘端に近いところに位置しており、墳丘と玄室の位置を考慮すると単室構造と推測する。墳頂部は祠や攪乱のため旧状をとどめていないが、墳丘高は2.5m程度と考えられる。墳丘の断ち割り調査から、墳丘および石室の裏込めは異なる埋土を積み重ねる工法で築造されていたことがわかる（写真18・20・21）。



第２図　志手金毘羅山古墳　測量図（1975年当時の測量図をトレース）（1/300）



第３図　志手金毘羅山古墳石室実測図（渋谷1989をトレース・一部加筆）（1/40）

横穴式石室は西方向の海にむかって開口する。調査時の写真（写真1）では、石室は墳丘のかなり高い位置に開口しているように見えるが、これは墳丘の周囲全体が削平を受けた結果であり、古墳の端部と石室床面は本来ほぼ同じレベルにあったとみられる。

石室の石材は厚みのある巨石ではなく板状の角閃石安山岩を使用し、一枚板の腰石を奥壁・側壁に立てた後、上部に板石を4～5段平積みする。実測図を見ると、左側壁の石積みでは斜め方向に目地が通っているようにみえる。玄室は奥行1.6m、幅0.8m、高さ1.5mで、長方形プランの小規模石室である。袖石の片側は採土による削平でなくなっているが、両袖式とみられる。床面には大小の板石を敷きつめている。

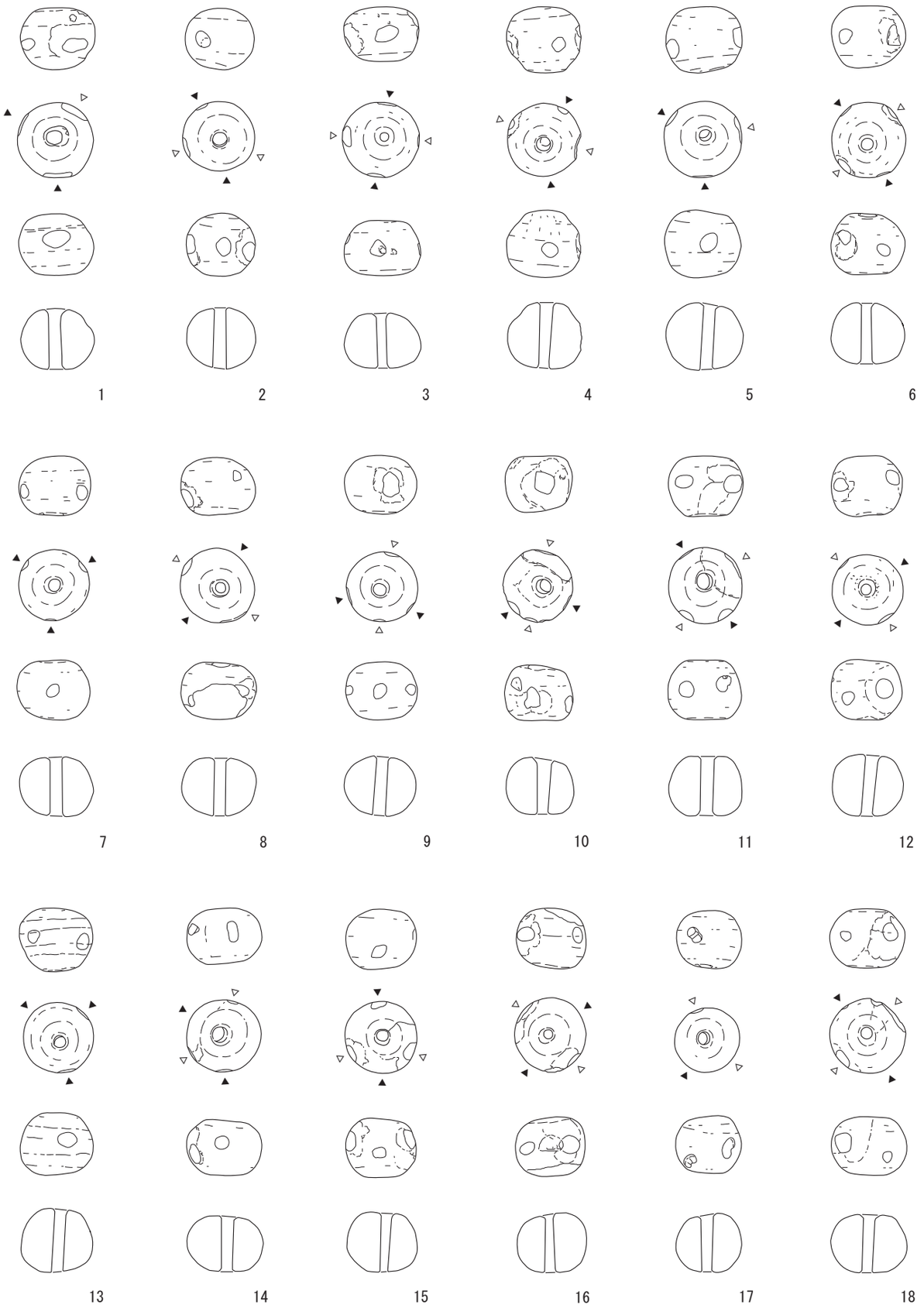
出土遺物について（第4～7図）

現在、出土遺物は大分県立埋蔵文化財センターに所蔵されている。大分県立歴史博物館にも遺物の一部が所蔵されているが、古墳に関連するものはない。

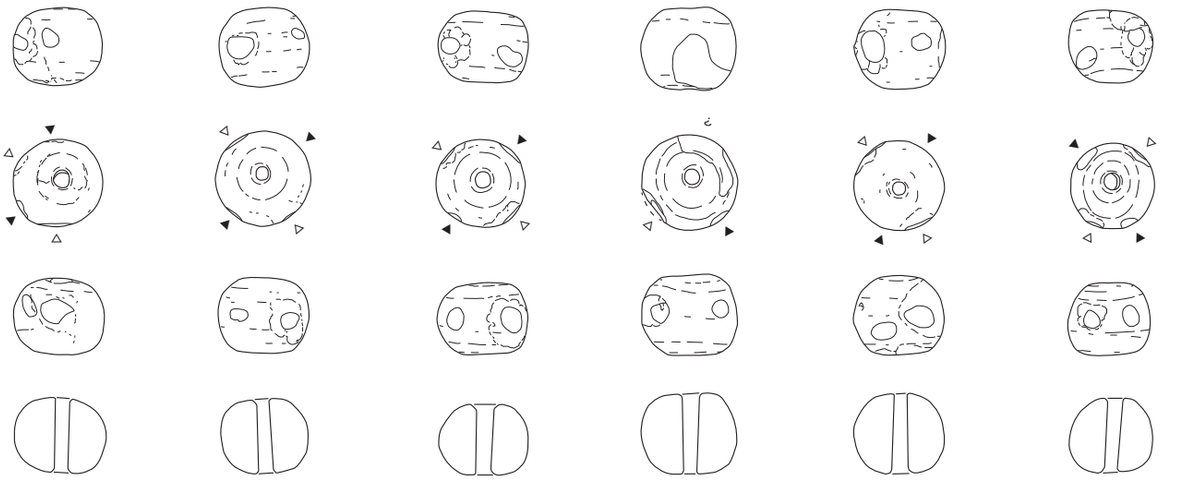
さて、遺物は調査から半世紀近く保管するなかで若干混乱が生じてしまった。志手金毘羅山古墳出土と明記され保管されていた遺物はトンボ玉・丸玉・ガラス小玉・銀環・鉄製品・須恵器などで、金環・勾玉・管玉は出土地不明として保管されていた。こうした遺物を志手金毘羅山古墳のものと特定できた資料もあわせて、各遺物を紹介していく。

トンボ玉（第4・5図）

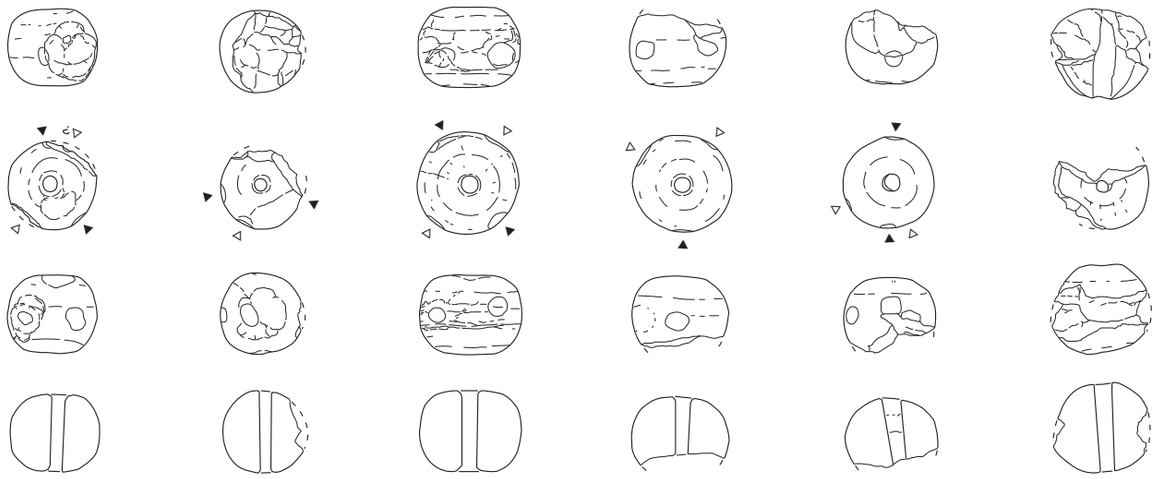
トンボ玉とは、2種以上の異なった色で模様を象嵌するガラス玉であり、雁木玉など多くの種類をまとめた総称として使用されている。トンボ玉の種類については安永周平氏の分類に詳しい（安永2006・2008他）が、志手金毘羅山古墳から出土したトンボ玉は地玉となるガラス玉の表面に色調の異なるガラス片を斑点状に象嵌



第4図　志手金毘羅山古墳出土遺物実測図①（1/1）



19 20 21 22 23 24



25 26 27 28 29 30

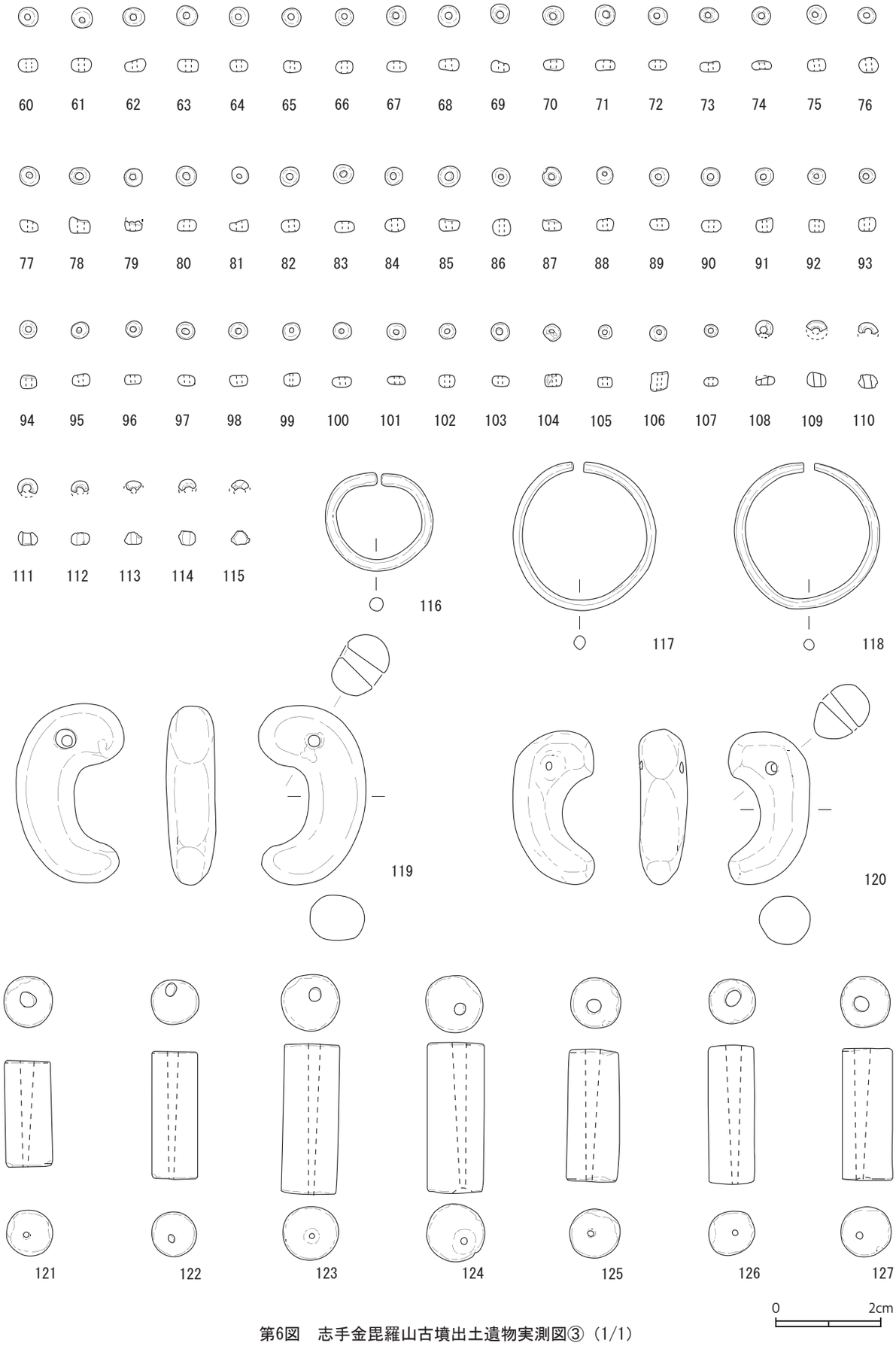
※ △黄色　▲黄緑色

32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

31 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59

0 2cm

第5図　志手金毘羅山古墳出土遺物実測図②（1/1）



第6図　志手金毘羅山古墳出土遺物実測図③（1/1）

したものである。こうした特徴のトンボ玉を、ここでは「斑点文トンボ玉」と呼んでいく。

斑点文トンボ玉（1～29）は29点出土しており、そのうち完形が26点で残りは一部が欠けている。また斑点文の配置される部分が大きく欠けている資料（30）があり、これも斑点文トンボ玉であった可能性が高い。

斑点文トンボ玉は紺色透明の地玉に、黄緑色半透明・黄色不透明の斑点が象嵌される。形状は上下が押しつぶされた扁球形を呈するものが多い。斑点文は1個体につき3～4つあり、原則として色の異なる斑点が交互に、均等に配置されるものが多い。しかし同色の斑点文が隣り合うものや斑点配置が偏るなど規則性のやや崩れた個体もわずかに存在する。斑点にはガラス小玉の破片を用いたとみられる資料（写真28）があるため、この他の斑点についても同様にガラス小玉の破片を用いた可能性がある。黄色不透明の斑点周囲には亀裂が入るもの（写真29）が多く、色も鮮やかさを欠き劣化が認められるものが多い。斑点文トンボ玉の表面には4ないし5条の融着単位とみられる縞が見られる（写真27）ことから、巻き付け法で製作されたと推測する。中心孔の形状は円柱形で、孔壁面にはわずかに凹凸が観察（写真30）できるが、これは巻き付け法で製作した際の軸との接触面を反映した痕とみられる。

丸玉（第5図）

丸玉（31）は1点出土している。色調は紺色透明で、斑点文トンボ玉の地玉と同色である。計測可能なトンボ玉と丸玉の法量分布（表1）をみると、丸玉の法量はトンボ玉とおおむね同規格といえる。

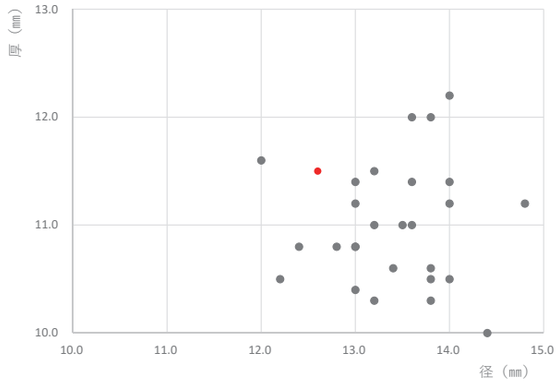
ガラス小玉（第5・6図）

ガラス小玉（32～115）は84点出土している。そのうち完形および半分以上残存するものが80点、半分以下しか残存せず接合しない破片が4点である。色調には淡青緑色・淡青色・濃青緑色・濃青色・黄緑色・黄色・紺色があるが、大多数を紺色が占める。ガラス小玉の法量分布（表2）をみると、一部（32・53・57）を除きほぼ同規格で製作されていることがわかる。

金環（第6図）

金環は1点出土している。出土地不明の遺物として保管され、更にある段階から別遺跡の遺物と誤って認識された結果、埋蔵文化財センター刊行の図録『遺物が語る大分の歴史』には飛山横穴墓群出土として紹介されていた。しかし大分合同新聞記事や岩野勝『私の郷土探訪』などの調査当時の写真（第8図）を見ると、この金環が志手金毘羅山古墳のものであることは確実といえるため、ここで訂正しておきたい。

金環（116）は金製の無垢環とみられ、外径18.8×20.4mm、内孔径14.3×16.3mm、厚2.1mm、重量は2.8gで



※赤は丸玉

表1　斑点文トンボ玉・丸玉法量分布

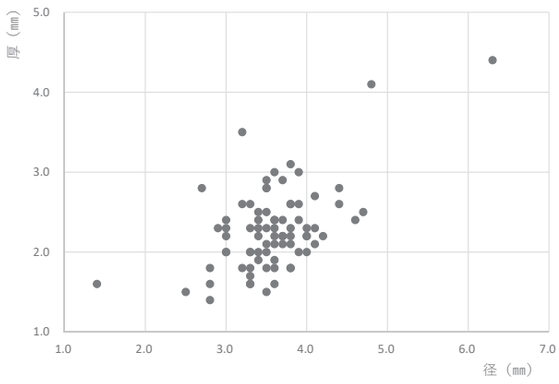
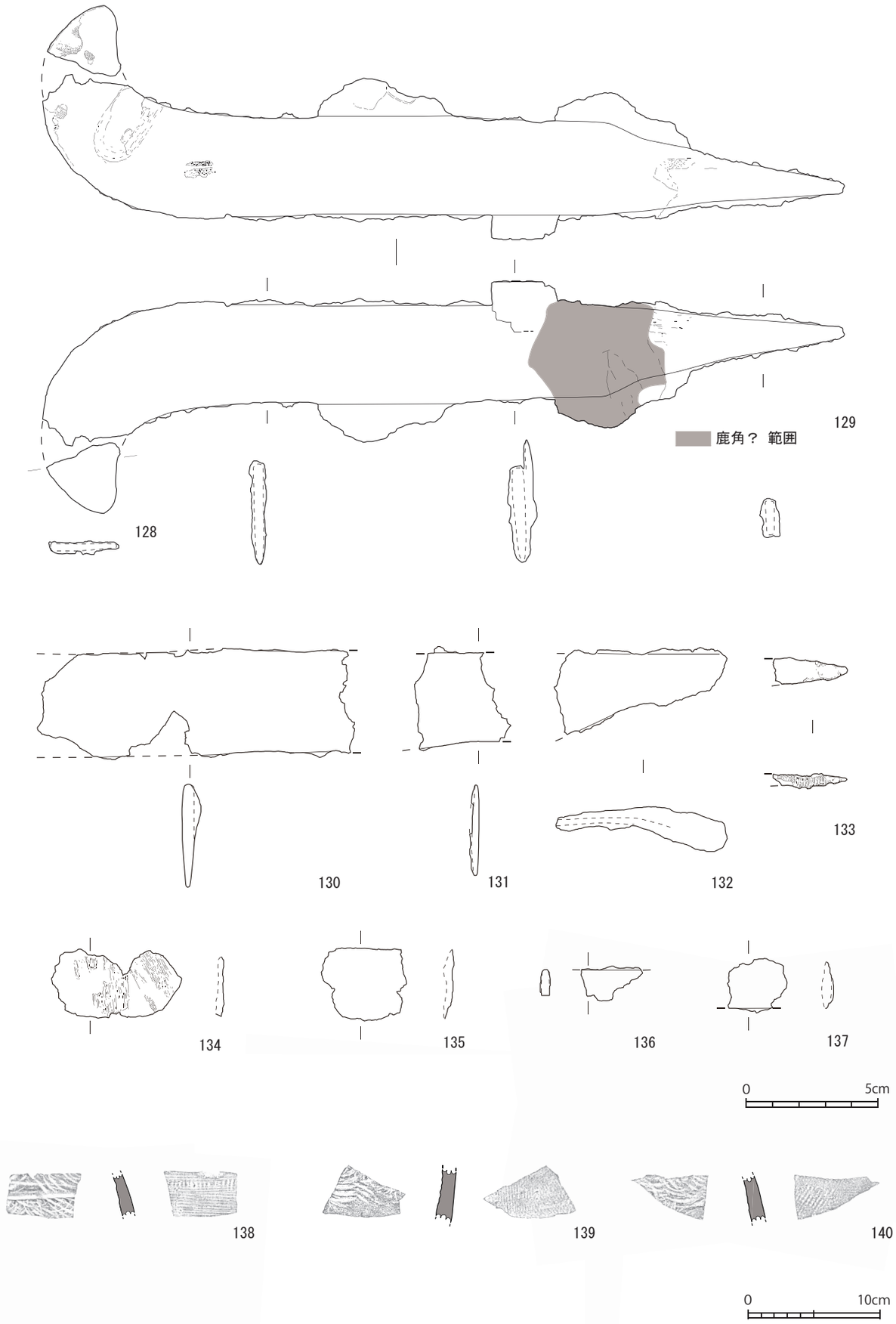


表2　ガラス小玉法量分布



第7図　志手金毘羅山古墳出土遺物実測図④（1/2・1/4）

ある。

銀環（第6図）

銀環（117・118）は2点出土している。表面はくすんだ銀色で、無垢環とみられる。117は外径28.2×26.9㎜、内孔径24.5×23.5㎜、厚1.9㎜、重量2.2g、118は外径27.4×27.0㎜、内孔径24.0×23.7㎜、厚1.8㎜、重量2.1gで、ほぼ同規格である。表面に面取りを施すため、断面が隅丸の菱形を呈する。

勾玉（第6図）

勾玉は2点出土している。出土地不明として保管されていたが、写真（第8図）から志手金毘羅山古墳のものと特定することができた。

山陰系とみられる瑪瑙製（119）と碧玉製（120）勾玉である。瑪瑙製勾玉は研磨が良好で、表面は滑らかな曲面となり、研磨単位の境界は残らない。長胴化指数（全長/幅）は1.69とやや縦長である。片面穿孔で、割れ円錐が生じた後に研磨を施す。碧玉製勾玉は研磨がやや雑で、研磨単位の境界が直線的に残っている。片面穿孔で、割れ円錐が生じた後に研磨を施す。

管玉（第6図）

管玉も出土地不明として保管されていた資料である。管玉については写真から特定することは困難であったが、勾玉と同じケースに収納されていたこと、そこに収納されていた点数が古墳から出土した点数と同数であったこと（註2）から、断定はできないが志手金毘羅山古墳の可能性が高いと考え紹介する。

管玉（121～127）は深緑色の碧玉製である。長さは20.2～28.8mmと個体差がある。いずれも片面穿孔で、割れ円錐が生じた個体もある。

鉄製品（第7図）

鉄製品はこれまで鎌状鉄器と呼ばれる資料の他に剣・刀子・鉄鏃の出土が紹介されてきた。鎌状鉄器以外のものはおそらく破片資料からの推測とみられるが、今回改めて鉄製品を接合・観察した結果、鎌状鉄器が2個体あるとの考えに至った。この復元にあたっては井大樹・荻山琴美両氏の意見によるところが大きい。ここでは鎌状鉄器を「不明鉄器」と呼んでいく。

128・129はほぼ全形がわかる資料で、これを不明鉄器1とする。鎌のように先端部が屈曲する形状だが、茎部を有する特徴が鎌とは異なる。128は先端部で、129とは決定的な接合をなさないが、同一個体であるのは確実とみられる。推定全長約30.5cm、幅4cm、厚0.4cmである。刃は明確に作り出していないが、背の方がやや厚みがある。茎部は先端に向かって先細る形状で、大分県立歴史博物館でのX線透過撮影によって茎部に目釘孔がないことが判明した。関は片側のみの、なだらかなナデ関である。

不明鉄器1の表面には多くのものが錆着している。柄縁に近い身部には別の鉄製品の一部が付着しているほか、部分的に木質・布の繊維痕（写真41・42）・材質不明の白色有機物（写真37・38）・先端部付近には囲蛹殻とみられる痕（写真41・43）が確認できる。布の繊維痕は先端あたりを中心に、木質は茎部を中心に観察できることから、副葬時は木製柄に、身には布が巻かれていた可能性がある。また、柄縁あたりには鹿角のような痕（写真39・40）が観察できるため、刀剣類にみられる鹿角装のようなものがあった可能性も考えられる。仮にこうした木製柄や装具を備えていたとしても実用性にとぼしいことから、儀器などの用途を考えておきたい。

この不明鉄器については、知る限りでは岩橋由季・松浦宇哲両氏が福岡県飯塚市櫨山古墳（横穴墓）出土

4-25　耳環（じかん）

飛山横穴墓群　大分市　6世紀

17号横穴墓から出土した2点の耳環は、本来耳に装着するためのC字状の隙間にガラス玉がはめ込まれており、その意味するところが興味深い。いずれにしても、稀少で装飾性の高い例といえる。耳環は銅に金箔を押して作っている。

27号横穴墓から出土した耳環である。小型で細い例である。地金は金銅であろうか。

▲ 大分県立埋蔵文化財センター 2017『遺跡が語る大分の歴史』67 ページより転載

※ 飛山横穴墓群出土品として紹介されているが、右下は志手金毘羅山古墳出土の金環

金環や鉄製カマが出土

志手金比羅山古墳

県教委と豊後高田市教委は十六日から八日間の予定で同市志手の国道沿いにある志手金比羅山古墳（六世紀後半）の調査をしているが、十七日には金環など数点の出土品があった。

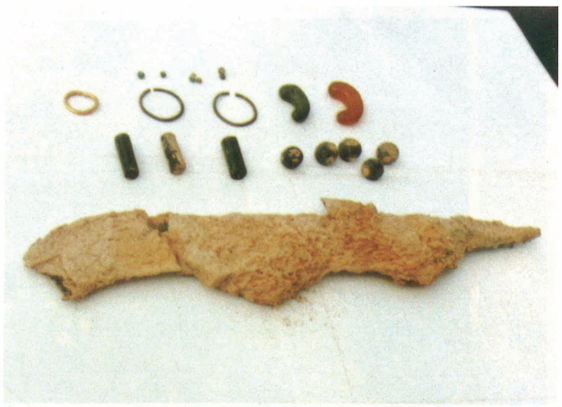
この古墳は直径十数メートルの小型のもの。四十七年、国道改良工事で削られ、半分しか残っていなかった。五月、同古墳の土取りをしていて石室がポッカリ出てきた。このため記録保存の目的で調査を始めたもの。

十七日までの調査で、横穴式石室から鉄製カマ（刃渡り二十二センチ）金環（金張り、長径二センチ、短径一・一センチ）ガラス製丸玉三個、碧玉の管玉四個が出土した。いずれも副葬品で、カマ以外は、被葬具。金環は県下では坂ノ市の飛山横穴群から出土している。

今後は、石室の実測などをするが、石室内には玄室に排水溝や床面の敷石などもある。

市文化財保存会の日浦保徳委員長は「金環は非常に貴重なもの」と、その出土を非常に喜んでいる。

志手金比羅山古墳。下は出土した鉄のカマや金環、ガラス玉



志手金比羅山古墳出土品
昭和50.9.23　桑原清氏撮影

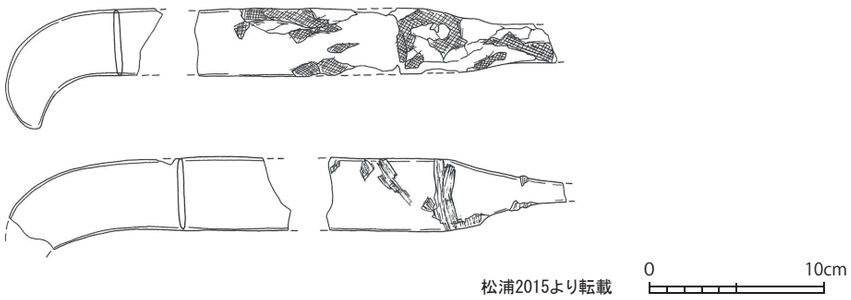
▲ 岩野勝 1980『私の郷土探訪』より転載

※ 調査当時に出土遺物を撮影した資料。カラー写真のおかげで、出土地不明として保管されていた遺物の特定にとても役立った。

◀ 大分合同新聞 1975 年 9 月 19 日夕刊より転載

※ 調査期間中に掲載された記事で、調査経緯や遺物についての記述がある。9 月 17 日までの調査で、管玉の出土が 4 点であることがわかる。

第8図　志手金毘羅山古墳関連資料



第9図　福岡県飯塚市櫨山古墳（横穴墓）出土不明鉄器（1/4）

大型鎌の再検討を行い、不明鉄器と位置付け直した鉄器（第9図、岩橋2015・松浦2015）が類例としてあげられる。関の形状こそ異なるものの、全体の形状や大きさは類似し、刃を作り出さない点も共通している。

130～133は全体が接合しないが、不明鉄器1の各部位との類似性と刃を明確に作り出さない特徴からほぼ同形のものに復元できると判断した。これらを不明鉄器2とする。全て破片であり、片面が剥落するなど残りは良くない。130は身の部分、131は茎に近い部分、132・133は茎部である。茎部は意図的なのかは判断できないが、ゆるやかに屈曲している。134～137の破片も片面が剥落し残りがよくないことから、部位こそ特定できないが不明鉄器2と同一個体とみられる。134の表面には木質が残っている。

須恵器（第7図）

須恵器は、器種の特定ができない壺や甕・瓶などの胴部片とみられる破片3点のみである。いずれも外面にタタキ・カキメ、内面にはあて具痕がナデ消されずに残る。MT15の須恵器が出土しているという記述もある（吉田2000）が誤記のようで、所蔵資料からは確認できない。石室前の土をふるいにかけ土器を探したが発見できなかった（岩野1980）との記述からも、須恵器はほとんど出土していないことがうかがえる。

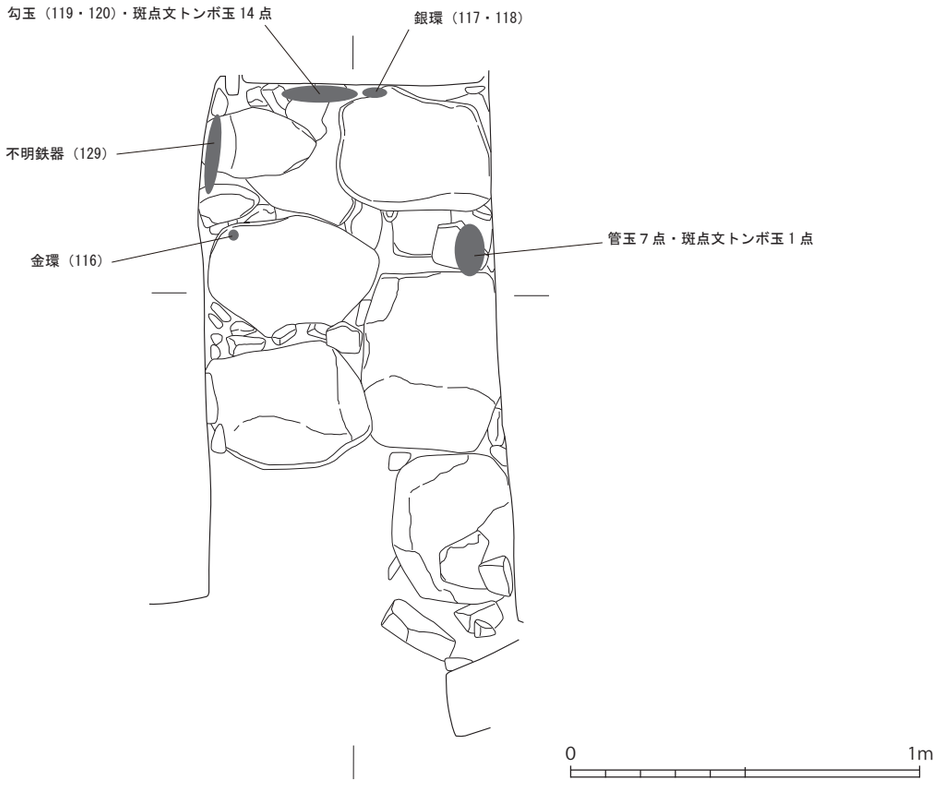
その他

古墳に関連しない遺物も少量出土している。石器の素材として持ち込まれたとみられる姫島産黒曜石の原石・石鏃・剥片、寛永通宝（古寛永1点・新寛永2点）などであり、主要な資料の写真を掲載（写真48）しておく。寛永通宝は墳頂部にあった祠に関連する遺物、姫島産黒曜石は墳丘に設定したトレンチから出土したものとみられ、周辺に古墳時代以前の遺跡があった可能性を示す資料である。

出土状況について（第10図）

遺物の出土地点を記録した図面はないが、調査時の写真や当時の調査担当であった渋谷忠章氏からの聞き取りのおかげで、おおよその出土状況をうかがうことができた。

遺物の多くは石室の隅に偏って出土している。床面の敷石は平坦に整っておらず、中央から壁際にむかって傾斜（写真5）しているようにもみえ、遺物が壁際や敷石の隙間へまとまった要因の一つと考えられる。石室奥壁際からは勾玉2点・斑点文トンボ玉14点・銀環2点（写真10・12・13・15）が、左側壁際からは管玉7点と斑点文トンボ玉1点（写真11・14）が、右側壁際からは不明鉄器1（写真8）と金環1点（写真9）が出土している。いずれも原位置をそのまま留めているとはいえないが、遺物のまとまりはある程度認めてよいと考えている。そこから推測すると、装身具が奥壁側に集中することから、被葬者の頭位は奥壁側にあったとみられる。装身具は近



第10図　志手金毘羅山古墳　遺物出土位置図（1/20）

接して出土した勾玉と斑点文トンボ玉の組み合わせによるネックレスが推測でき、大量の斑点文トンボ玉の使用状況を復元するうえで役立つ。管玉は単体もしくは少数のトンボ玉との組み合わせが推測できる。写真に記録されていない残りの斑点文トンボ玉・ガラス小玉については、石室内埋土のふるいの作業によって出土したもので、出土位置を正確に知ることはできない。勾玉などの装身具からは新旧の遺物が混在する様相もうかがえるが、出土状況からは追葬を考えるのは厳しいとみられる。不明鉄器1は先端部を石室入口方向に向けて出土している。不明鉄器2については、不明鉄器1に錆着する鉄片や茎部にみられる色調の違いなどから重なっていた可能性もあるが、出土状況は不明である。

まとめ

志手金毘羅山古墳の時期は、これまで6世紀前半頃といわれてきた。豊後高田市周辺の西国東半島において、調査により横穴式石室の構造が判明している例は西田古墳・雷鬼岩屋古墳・伊美鬼塚古墳など少ない。事例が少ない中で、吉田和彦氏は大ぶりの石でより少ない大石で腰石を形成しているものを新しい様相とみる（吉田2002）。規模は小さく（註3）単純に比較できないかもしれないが、志手金毘羅山古墳の石室は奥壁・側壁の腰石に複数の石ではなく一枚の板石を用いている点を重視すると、これまでいわれてきた時期よりも新しく位置付ける方が妥当とみられる。出土遺物のなかで須恵器は時期決定の決め手とならないが、こうした中で斑点文トンボ玉が時期を考える上での参考となる。

斑点文トンボ玉が出土した古墳は全国でわずか90例程（第11図）しか確認できず、総出土個数もわずかである。そのため斑点文トンボ玉は通常の丸玉と比べ希少性があり、威信財としての機能を有していたとも考えられている。斑点文トンボ玉の祖型は新羅に求められ、5世紀中頃から日本に搬入される。導入期には畿内を中心に若狭湾や東海地域で見られたものが、6世紀前半頃には前方後円墳を中心に分布域を広げていく。そして6

世紀後半段階からは小規模墳からの出土が増加するとともに、1基あたりからの出土数の増加が認められ、分布域も瀬戸内沿岸などの西日本一帯で増加する。こうした出土数の増加にともない導入期に認められた精緻なものから粗雑化の傾向が認められることから、斑点文トンボ玉の多くが国産化されたと考えられる。6世紀末からは古墳への埋葬から寺跡への埋納に移り変わっていく流れをみせるようである。

さて、志手金毘羅山古墳の斑点文トンボ玉をみると、一基の古墳に30点近く大量に副葬されていること、規則性が崩れたものを含みやや粗雑な特徴を示すことから、6世紀後半段階の特徴と見ることができる。このことから、現段階では志手金毘羅山古墳の時期を6世紀後半ととらえておきたい。

古墳時代の地域区分で、田中裕介氏は豊後高田市を第1地帯（宇佐地域～西国東地域）とし、首長墓が古墳時代前期から後期まで継続して前方後円墳を採用するが、盟主首長墓のみが大型の円墳や前方後円墳を築造し、それ以外では前方後円墳が築造されないという墳墓形式において階層性が明確に認められる地域と指摘する（田中2010）。こうした豊後高田市の有力首長墓とみられる前方後円墳は、全てが海に面する、海を意識した段丘先端に立地しており、周辺には小規模墳をともない古墳群を形成している。

志手金毘羅山古墳の時期と考える6世紀後半は、それまで系列的に築造されてきた大型前方後円墳の築造が停止し、墳墓形式の階層性や盟主首長の移動を含めた政治的変動が生じた時期と考えられている。志手金毘羅山古墳の被葬者は墳丘・石室は小規模であるにも関わらず、副葬された遺物には斑点文トンボ玉・不明鉄器など特殊性が顕著に認められる。志手金毘羅山古墳の被葬者がこうした遺物を入手できた背景には、当時の主要交通路であった海上を通じて行われた交流が想起でき、連綿と築造されてきた首長系譜の古墳にも通じる立地をとりながらも、それまで古墳が築造されていなかった場所に古墳群を形成することなく単独で存在することから、社会的変化により新たに台頭した地域の有力者像が想像できる。

おわりに

志手金毘羅山古墳の発掘調査は、大分県の行政発掘が始まったばかりの、まさに黎明期に実施された。現在のように調査体制が十分とはいえない中で、関係者の尽力と、大分県立高田高等学校の先生・生徒の皆様の支えがあって、調査を成し遂げることができたといえる。調査に参加し貴重な文化財を残すことにご協力頂いた方々に、改めて感謝の意をここに記したい。

今回の資料紹介にあたり、各氏・各機関の皆様からは多大なるご協力・ご教示を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

井大樹　池田匡彦　岩男真吾　荻山琴美　渋谷忠章　田中裕介　玉川剛司　仲和彦　西貴史　綿貫俊一

大分県立図書館　大分県立歴史博物館　大分合同新聞社　豊後高田市立高田中学校

（註1）

岩男真吾氏ご教示。文献（岩野1980）にも記述がある。

（註2）

管玉の出土個数は、出土状況写真を数えると7点であるのに対し、岩野勝が記した詳細な調査日誌（岩野1976・1980）では8点とある。日誌の記述からは17日に5点・21日に3点出土とあるが、19日に掲載された大分合同新聞では17日までの調査で管玉が4点出土とある（第8図）。そのため岩野勝の日誌にある17日の5点は4点の誤りとみている。

（註3）

小規模石室は和田鼻古墳群でも確認されている。7号墳は削平のため上部構造は不明だが、志手金毘羅山古墳と同規

模の小石室で、抜き取り痕から側壁には2枚の板石が用いられたとみられる。ここからはTK43段階の須恵器が出土している(吉田1999)。

【主要参考文献】

岩野勝 1976「志手金毘羅山古墳調査見学記」『国東半島の文化　会誌第6号』国東半島の文化を守る会

岩野勝 1980『私の郷土探訪』草場印刷所

岩橋由季 2015「遠賀川流域における横穴墓の出現と展開」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

大分県教育委員会 1973『豊後高田市埋蔵文化財分布一覧』大分県教育委員会

大分県立埋蔵文化財センター 2017『遺跡が語る大分の歴史』大分県立埋蔵文化財センター

大賀克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財566号』第一法規出版

久多羅木儀一郎 1925「国東半島に於ける古墳の分布」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第4輯』

河野清実 1932『国東半島史　下巻』東国東郡教育会

酒井富蔵 1957『豊後高田市誌』国東半島文化研究所

渋谷忠章 1977「志手金比羅山古墳」『日本考古学年報28(1975年版)』日本考古学協会

渋谷忠章 1989「古墳文化の展開」『大分県史　先史篇Ⅱ』大分県

田中裕介編 1998『大分の前方後円墳』大分県教育委員会

田中裕介 2010「東九州における首長墓の変遷と性格」『第13回九州前方後円墳研究会　九州における首長系譜の再検討』九州前方後円墳研究会

十時英司 1940『町村別大分県史蹟伝説地詳図』郷土史蹟伝説研究会

長滝歳康 2002「白石第18号古墳のトンボ玉とその提起する問題」『白石古墳群　登所地区・中原地区』埼玉県児玉郡美里町教育委員会

福島雅儀 2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学　第54号』日本文化財科学会

藤村翔 2011「国久保古墳出土遺物の検討」『平成13年度富士市内遺跡・伝法国久保古墳』富士市教育委員会

松浦宇哲 2015「農耕具からみた山の神古墳の被葬者像」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

真野和夫 1976「古墳時代」『大分の歴史(1)』大分合同新聞社

真野和夫 1998「前方後円墳の時代」『豊後高田市史　通史編』豊後高田市

宮崎認 2018「トンボ玉」『玉　古代を彩る至宝』ハーベスト出版

安永周平 2003「ガラスに見る大陸文化」『古墳時代の装飾品　玉の美』栗東市文化体育振興事業団

安永周平 2006「双六古墳出土の装飾付ガラス玉(通称トンボ玉)について」『双六古墳』長崎県壱岐市教育委員会

安永周平 2008「装飾付ガラス玉研究序論」『橿原考古学研究所論集第十五』奈良県立橿原考古学研究所

安永周平 2012「トンボ玉(装飾付ガラス玉)の評価」『長越長火塚古墳』豊橋市教育委員会

吉田和彦 1999「大分県の横穴式石室」『第2回九州前方後円墳研究会　九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

吉田和彦 2000「大分県の横穴式石室　その階層構造理解について」『おおいた考古　第13集』大分県考古学会

吉田和彦 2002「西田古墳」『佐野地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市教育委員会

写真１　調査前風景（西より）

写真２　調査前石室開口状況（西より）

写真３　国道側から見た志手金毘羅山古墳（東より）

写真４　調査風景（西より）

写真５　石室内の敷石

写真６　腰石と石積み

写真７　天井部付近の石積み

写真８　不明鉄器出土状況

写真 9　金環出土状況

写真 10　斑点文トンボ玉出土状況

写真 11　管玉出土状況

写真 12　勾玉・斑点文トンボ玉出土状況

写真 13　斑点文トンボ玉・銀環出土状況

写真 14　管玉・斑点文トンボ玉出土状況

写真 15　勾玉・斑点文トンボ玉・銀環・管玉出土状況

写真 16　石室開口部と墳丘断面

写真 17　石室開口部と墳丘断面（西より）

写真 18　墳丘断面土層（西より）

写真 19　石室上部（東より）

写真 20　石室上部（南より）

写真 21　墳丘土層（西より）

写真 22　腰石・石室上部（南東より）

写真 23　豊後高田市立高田中学校に移設された石棺材

写真 24　現在の志手金毘羅山古墳

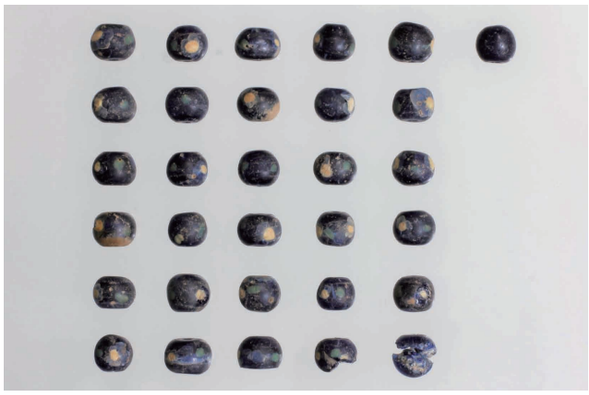


写真 25　斑点文トンボ玉・丸玉

写真 26　斑点文トンボ玉（27）

写真 27　斑点文トンボ玉（13）

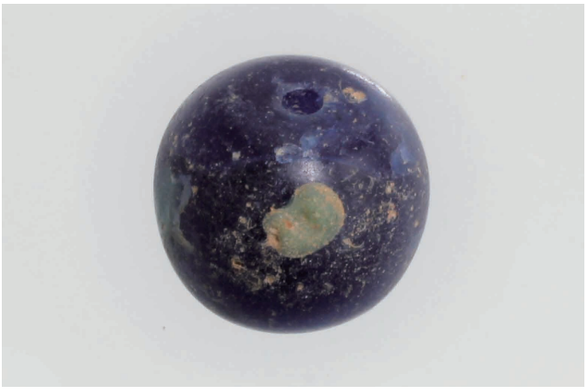


写真 28　斑点文トンボ玉（17）斑点文部分

写真 29　斑点文トンボ玉（2）斑点文周辺の亀裂

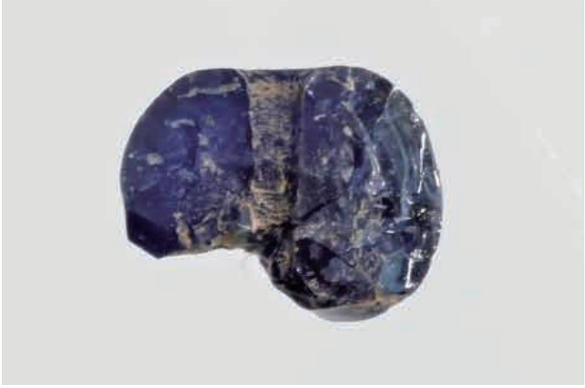


写真 30　斑点文トンボ玉（29）孔壁面

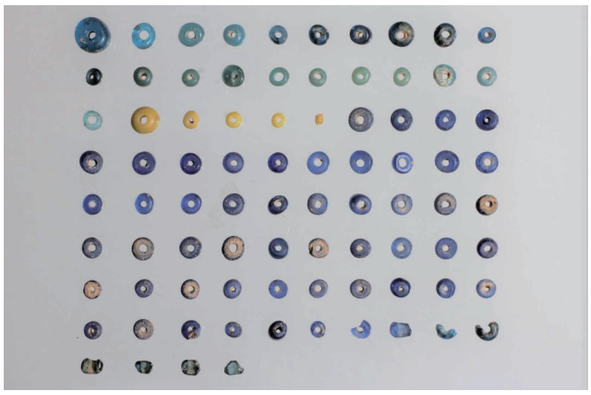


写真 31　ガラス小玉

写真 32　金環・銀環

写真 33　勾玉

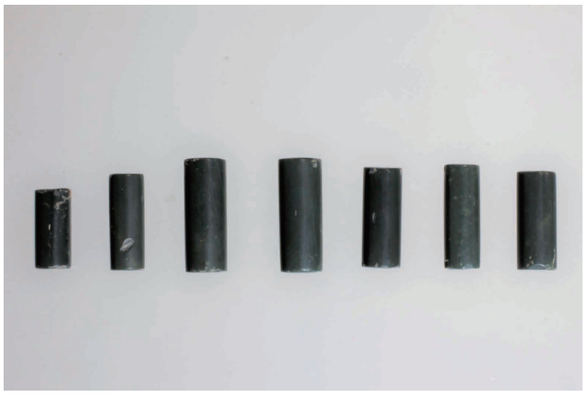


写真 34　管玉

写真 35　不明鉄器 1

写真 36　不明鉄器 1

写真 37　不明鉄器 1　白色の不明有機物

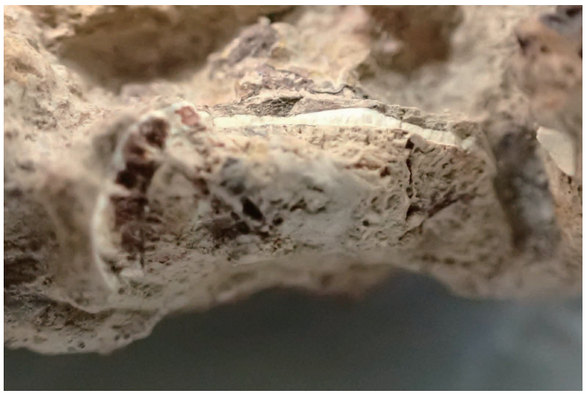


写真 38　不明鉄器 1　白色の不明有機物

写真 39　不明鉄器 1　鹿角か

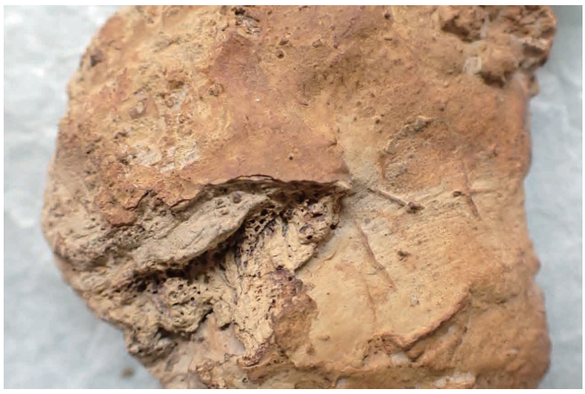


写真 40　不明鉄器 1　鹿角か

写真 41　不明鉄器 1　繊維・囲蛹殻か

写真 42　繊維　実体顕微鏡撮影（大分県立歴史博物館）

写真 43　囲蛹殻か

写真 44　不明鉄器 2

写真 45　不明鉄器 2

写真 46　不明鉄器 2 の破片か

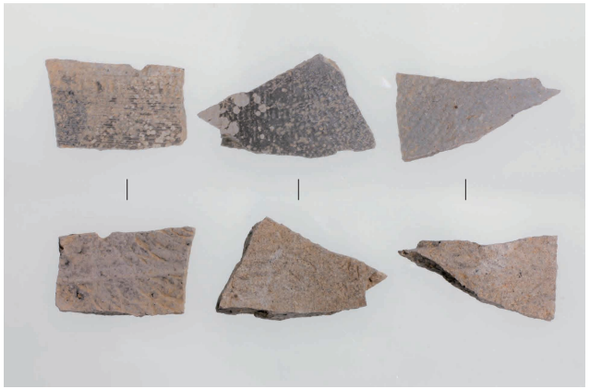


写真 47　須恵器

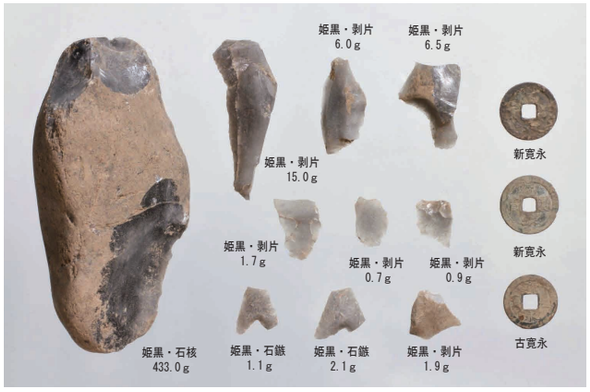


写真 48　その他遺物

斑点文トンボ玉　観察表

No	種類	材質	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調		備考
							地玉	斑点	
1	斑点文トンボ玉	ガラス	14.0	11.2	2.4	3.2	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
2	斑点文トンボ玉	ガラス	13.0	11.4	2.6	2.6	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
3	斑点文トンボ玉	ガラス	14.4	10.0	2.2	3.0	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
4	斑点文トンボ玉	ガラス	13.8	12.0	2.2	3.0	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
5	斑点文トンボ玉	ガラス	14.0	12.2	2.0	3.5	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
6	斑点文トンボ玉	ガラス	14.0	11.4	2.2	3.0	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
7	斑点文トンボ玉	ガラス	13.6	11.4	2.2	3.0	紺色透明	黄緑色半透明	完形
8	斑点文トンボ玉	ガラス	13.8	10.6	2.2	2.8	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
9	斑点文トンボ玉	ガラス	13.0	10.8	2.0	2.5	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
10	斑点文トンボ玉	ガラス	13.2	10.3	2.5	2.5	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
11	斑点文トンボ玉	ガラス	14.0	10.5	2.8	2.9	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形・ガラス小玉片を使用か
12	斑点文トンボ玉	ガラス	13.0	10.8	2.0	2.7	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
13	斑点文トンボ玉	ガラス	13.0	11.2	2.0	2.7	紺色透明	黄緑色半透明	完形
14	斑点文トンボ玉	ガラス	13.8	10.3	2.2	2.7	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
15	斑点文トンボ玉	ガラス	13.6	11.0	1.8	2.7	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
16	斑点文トンボ玉	ガラス	13.5	11.0	2.2	2.9	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
17	斑点文トンボ玉	ガラス	12.4	10.8	2.4	2.4	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形・ガラス小玉片を使用か
18	斑点文トンボ玉	ガラス	13.8	10.5	2.2	2.9	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
19	斑点文トンボ玉	ガラス	12.8	10.8	2.2	2.5	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
20	斑点文トンボ玉	ガラス	13.4	10.6	2.2	2.8	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
21	斑点文トンボ玉	ガラス	13.0	10.4	2.1	2.5	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
22	斑点文トンボ玉	ガラス	13.6	12.0	2.2	3.2	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形・ガラス小玉片を使用か
23	斑点文トンボ玉	ガラス	13.2	11.5	2.0	2.7	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
24	斑点文トンボ玉	ガラス	12.2	10.5	2.2	2.1	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
25	斑点文トンボ玉	ガラス	13.2	11.0	2.0	2.6	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
26	斑点文トンボ玉	ガラス	12.0	11.6	2.0	2.1	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	一部欠損
27	斑点文トンボ玉	ガラス	14.8	11.2	2.2	3.6	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	完形
28	斑点文トンボ玉	ガラス	14.0	9.8＋α	2.0	2.7	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	2/3残存
29	斑点文トンボ玉	ガラス	13.2	10.0＋α	2.4	2.0	紺色透明	黄緑色半透明・黄色不透明	1/2欠損
30	斑点文トンボ玉か	ガラス	13.4＋α	12.4	1.9	1.7	紺色透明	ー	1/2欠損

丸玉・ガラス小玉　観察表

No	種類	材質	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	備考
31	丸玉	ガラス	12.6	11.5	2.0	2.6	紺色透明	完形
32	小玉	ガラス	6.3	4.4	1.8	0.25	淡青緑色透明	完形
33	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.7	0.05	淡青色透明	完形
34	小玉	ガラス	4.6	2.4	1.5	0.06	淡青色半透明	完形
35	小玉	ガラス	4.7	2.5	1.2	0.05	淡青色半透明	完形
36	小玉	ガラス	3.3	2.0	1.3	0.03	濃青色透明	完形
37	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.4	0.05	濃青緑色透明	完形
38	小玉	ガラス	3.5	2.8	1.0	0.05	濃青緑色透明	完形
39	小玉	ガラス	4.4	2.8	1.3	0.07	濃青緑色透明	完形
40	小玉	ガラス	4.1	2.7	1.4	0.05	濃青緑色半透明	完形
41	小玉	ガラス	2.8	1.6	1.0	0.02	濃青緑色半透明	完形
42	小玉	ガラス	2.9	2.3	1.2	0.03	濃青緑色半透明	完形
43	小玉	ガラス	3.3	2.6	1.4	0.05	黄緑色半透明	完形
44	小玉	ガラス	3.0	2.3	1.0	0.03	黄緑色半透明	完形
45	小玉	ガラス	3.7	2.9	1.0	0.06	黄緑色半透明	完形
46	小玉	ガラス	3.4	2.0	1.6	0.03	黄緑色半透明	完形
47	小玉	ガラス	3.0	2.0	1.2	0.03	黄緑色半透明	完形
48	小玉	ガラス	3.3	1.7	1.0	0.02	黄緑色半透明	完形
49	小玉	ガラス	3.2	1.8	1.2	0.02	黄緑色半透明	完形
50	小玉	ガラス	3.9	3.0	1.0	0.05	淡青緑色半透明	完形
51	小玉	ガラス	3.4	2.2	1.2	0.04	淡青緑色半透明	完形

No	種類	材質	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	備考
52	小玉	ガラス	3.3	2.0	1.5	0.03	淡青緑色透明	完形
53	小玉	ガラス	4.8	4.1	1.2	0.13	黄色不透明	完形
54	小玉	ガラス	2.7	2.8	1.2	0.03	黄色不透明	完形
55	小玉	ガラス	2.8	1.8	1.2	0.02	黄色不透明	完形
56	小玉	ガラス	2.5	1.5	0.8	0.01	黄色不透明	完形
57	小玉	ガラス	1.4	1.6	0.5	0.00	黄色不透明	完形・重量計測不可
58	小玉	ガラス	4.4	2.6	1.5	0.07	紺色透明	完形
59	小玉	ガラス	3.9	2.6	1.3	0.06	紺色透明	完形
60	小玉	ガラス	3.6	2.4	1.1	0.05	紺色透明	完形
61	小玉	ガラス	3.9	2.4	1.1	0.05	紺色透明	完形
62	小玉	ガラス	4.0	2.2	1.3	0.05	紺色透明	完形
63	小玉	ガラス	3.8	2.3	1.3	0.06	紺色透明	完形
64	小玉	ガラス	3.7	2.4	1.2	0.05	紺色透明	完形
65	小玉	ガラス	3.6	2.3	1.2	0.04	紺色透明	完形
66	小玉	ガラス	3.4	2.5	1.0	0.04	紺色透明	完形
67	小玉	ガラス	3.8	1.8	1.4	0.04	紺色透明	完形
68	小玉	ガラス	4.1	2.1	1.3	0.05	紺色透明	完形
69	小玉	ガラス	3.6	2.2	1.5	0.03	紺色透明	完形
70	小玉	ガラス	4.2	2.2	1.5	0.04	紺色透明	完形
71	小玉	ガラス	4.0	2.0	1.2	0.04	紺色透明	完形
72	小玉	ガラス	3.5	1.8	1.2	0.03	紺色透明	完形
73	小玉	ガラス	3.6	1.8	1.4	0.03	紺色透明	完形
74	小玉	ガラス	3.6	1.6	1.5	0.03	紺色透明	完形
75	小玉	ガラス	3.6	2.1	1.4	0.04	紺色透明	完形
76	小玉	ガラス	3.5	2.9	1.2	0.04	紺色透明	完形
77	小玉	ガラス	3.7	2.2	1.2	0.04	紺色透明	完形
78	小玉	ガラス	3.8	3.1	1.8	0.05	紺色透明	完形
79	小玉	ガラス	3.7	2.2	1.3	0.04	紺色透明	完形
80	小玉	ガラス	3.8	2.2	1.4	0.04	紺色透明	完形
81	小玉	ガラス	3.6	2.4	1.2	0.03	紺色透明	完形
82	小玉	ガラス	3.5	2.3	1.5	0.04	紺色透明	完形
83	小玉	ガラス	3.8	1.8	1.5	0.04	紺色透明	完形
84	小玉	ガラス	3.8	2.6	1.5	0.04	紺色透明	完形
85	小玉	ガラス	4.1	2.3	1.5	0.05	紺色透明	完形
86	小玉	ガラス	3.6	3.0	1.2	0.05	紺色透明	完形
87	小玉	ガラス	3.5	2.1	1.1	0.03	紺色透明	完形
88	小玉	ガラス	3.7	2.1	1.1	0.04	紺色透明	完形
89	小玉	ガラス	3.5	2.0	1.2	0.04	紺色透明	完形
90	小玉	ガラス	3.9	2.0	1.2	0.04	紺色透明	完形
91	小玉	ガラス	3.5	2.5	1.3	0.05	紺色透明	完形
92	小玉	ガラス	3.0	2.4	1.0	0.04	紺色透明	完形
93	小玉	ガラス	3.2	2.6	1.1	0.04	紺色透明	完形
94	小玉	ガラス	3.4	2.3	1.2	0.03	紺色透明	完形
95	小玉	ガラス	3.3	2.3	1.0	0.04	紺色透明	完形
96	小玉	ガラス	3.3	1.6	1.2	0.03	紺色透明	完形
97	小玉	ガラス	3.3	1.8	1.3	0.03	紺色透明	完形
98	小玉	ガラス	3.8	2.1	1.1	0.04	紺色透明	完形
99	小玉	ガラス	3.5	2.8	1.0	0.05	紺色透明	完形
100	小玉	ガラス	3.4	1.9	1.1	0.04	紺色透明	完形
101	小玉	ガラス	3.3	1.6	1.0	0.03	紺色透明	完形
102	小玉	ガラス	3.0	2.2	1.2	0.03	紺色透明	完形
103	小玉	ガラス	3.6	1.9	1.2	0.03	紺色透明	完形
104	小玉	ガラス	3.4	2.4	1.0	0.04	紺色透明	完形
105	小玉	ガラス	3.0	2.0	0.9	0.02	紺色透明	完形
106	小玉	ガラス	3.2	3.5	1.2	0.05	紺色透明	完形
107	小玉	ガラス	2.8	1.4	1.1	0.01	紺色透明	完形

No	種類	材質	径（mm）	厚（mm）	孔径（mm）	重量（g）	色調	備考
106	小玉	ガラス	3.5	1.5	1.5	0.01	紺色透明	2/3残存
106	小玉	ガラス	3.5＋α	2.6	1.2	0.02	紺色透明	1/2残存
106	小玉	ガラス	3.8＋α	2.4	1.1	0.02	濃青緑色透明	1/2残存
106	小玉	ガラス	4.0	2.3	1.5	0.03	濃青緑色半透明	1/2残存
106	小玉	ガラス	3.8＋α	2.4	1.5	0.02	濃青緑色半透明	1/2残存・112との接合関係は不明
106	小玉	ガラス	3.0＋α	2.2	1.3	0.02	濃青緑色半透明	1/4残存・112との接合関係は不明
106	小玉	ガラス	3.0＋α	2.8	1.6	0.01	濃青緑色半透明	1/2残存・112との接合関係は不明
106	小玉	ガラス	3.4＋α	2.4	ー	0.02	濃青緑色半透明	1/4残存・112との接合関係は不明

金環・銀環　観察表

No	種類	材質	外径（縦×横）	内孔径（縦×横）	厚（mm）	重量（g）	色調	備考
116	金環	金	18.8×20.4	14.3×16.3	2.1	2.8	金色	無垢環
117	銀環	銀	28.2×26.9	24.5×23.5	1.9	2.2	銀色	無垢環
118	銀環	銀	27.4×27.0	24.0×23.7	1.8	2.1	銀色	無垢環

勾玉　観察表

No	種類	材質	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	孔径（mm）	重量（g）	色調	備考
119	勾玉	瑪瑙	34.2	20.2	9.0	3.2～2.0	8.1	茶褐色	完形
120	勾玉	碧玉	29.0	10.6	8.9	2.5～1.4	5.2	深緑色	完形

管玉　観察表

No	種類	材質	長（mm）	直径（mm）	孔径（mm）	重量（g）	色調	備考
121	管玉	碧玉	20.2	9.0	2.4～1.0	3.2	深緑色	完形
122	管玉	碧玉	24.4	9.0	2.1～1.3	3.7	深緑色	完形
123	管玉	碧玉	28.5	10.5	2.5～1.3	6.3	深緑色	完形
124	管玉	碧玉	28.8	10.9	2.4～1.2	6.7	深緑色	完形
125	管玉	碧玉	25.2	10.0	2.6～1.0	4.8	深緑色	完形
126	管玉	碧玉	26.6	9.0	3.5～1.2	4.1	深緑色	完形
127	管玉	碧玉	25.2	9.8	2.6～1.4	4.8	深緑色	完形

鉄製品　観察表

No	種類	材質	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考	
128	不明鉄器1	鉄	2.5	2.8	0.3	4.8	布痕・囲蛹殻？	同一個体
129	不明鉄器1	鉄	30.6	4.0	0.4	205.9	不明・鹿角装？・木質痕・鉄器	
130	不明鉄器2	鉄	12.2	4.0	0.4	64.7		同一個体か
131	不明鉄器2	鉄	3.5	3.6	0.3	12.2		
132	不明鉄器2	鉄	6.6	2.9	0.3	27.9		
133	不明鉄器2	鉄	2.8	1.0	0.4	1.7	木質痕	
134	不明鉄器	鉄	5.0	2.6	0.2	5.1	木質痕	不明鉄器2と同一個体か
135	不明鉄器	鉄	3.1	2.7	0.3	3.9		
136	不明鉄器	鉄	2.3	1.2	0.3	2.2		
137	不明鉄器	鉄	2.2	1.9	0.4	2.6		

須恵器　観察表

No	種別	器種	外面調整	内面調整	焼成	色調	備考
138	須恵器	瓶か	カキメ	タタキあて具痕・ナデ	良好	灰色	胴部・傾き不明
139	須恵器	壺or甕	タタキのちナデ	タタキあて具痕	良好	灰色	胴部・傾き不明
140	須恵器	壺or甕	タタキのち一部ナデ	タタキあて具痕	良好	灰色	胴部・傾き不明

No	古墳名	所在地
1	双六古墳	長崎県壱岐市
2	対馬塚古墳	長崎県壱岐市
3	東福寺古墳群ST014	佐賀県武雄市
4	諸田仮塚1号墳？	福岡県筑紫野市
5	正籠3号墳	福岡県糟屋郡宇美町
6	佐谷古墳	福岡県古賀市
7	池田1号横穴	福岡県飯塚市
8	山の神古墳	福岡県飯塚市
9	新池南古墳	福岡県築上郡上毛町
10	四ツ山古墳	熊本県荒尾市
11	志手金毘羅山古墳	大分県豊後高田市
12	持田古墳	宮崎県児湯郡高鍋町
13	上塩冶築山古墳	島根県出雲市
14	刈山古墳群5号墳	島根県出雲市
15	木谷11号墳	岡山県真庭市
16	二万大塚古墳	岡山県倉敷市
17	段塚1号墳	岡山県岡山市
18	弥上古墳	岡山県赤磐市
19	小竹6号墳・7号墳	愛媛県松山市
20	土壇原14号墳	愛媛県松山市
21	東野中畦遺跡C区2号墳	愛媛県松山市
22	東山鳶が森古墳群8号墳	愛媛県松山市
23	久米山田池2号墳	愛媛県松山市
24	城ノ向1号墳	愛媛県砥部町
25	法華寺裏山古墳	愛媛県今治市
26	鑵子塚古墳	香川県観音寺市
27	黒島林5号墳	香川県観音寺市
28	安造田東3号墳	香川県満濃市
29	真伏古墳	香川県坂出市
30	北山八坂古墳2号石室	香川県大川郡長尾町

No	古墳名	所在地
31	山田古墳群A1号墳	徳島県板野郡上板町
32	山田古墳群A3号墳	徳島県板野郡上板町
33	菖蒲谷西山B遺跡4号墳	徳島県板野郡上板町
34	鳥坂4号墳	兵庫県龍野市
35	園田大塚山古墳	兵庫県尼崎市
36	毘沙門1号墳	兵庫県神戸市
37	東山12号墳	兵庫県多可郡多可町
38	大藪古墳	兵庫県豊岡市
39	森尾大内谷古墳群5号墳	兵庫県豊岡市
40	大師山10号墳	兵庫県豊岡市
41	大師山11号墳	兵庫県豊岡市
42	城ヶ谷2号墳	大阪府大東市
43	富木車塚古墳	大阪府高石市
44	物集女車塚古墳	京都府向日市
45	上大谷12号墳	京都府城陽市
46	鴨山古墳	奈良県広陵町
47	星塚2号墳	奈良県天理市
48	新沢千塚204号墳	奈良県橿原市
49	沼山古墳	奈良県橿原市
50	井辺前山6号墳	和歌山県和歌山市
51	山東22号古墳	和歌山県和歌山市
52	塚穴古墳(志島古墳群4号墳)	三重県志摩市
53	奥弁天4号墳	三重県伊賀市
54	太岡寺古墳群	三重県亀山市
55	大通寺5号墳	滋賀県大津市
56	桜生古墳	滋賀県野洲市
57	大塚山古墳	滋賀県野洲市
58	十善の森古墳	福井県三方上中郡若狭町
59	泰遠寺山古墳	福井県吉田郡永平寺町
60	船来山272号墳	岐阜県本巣市

No	古墳名	所在地
61	大牧1号墳	岐阜県各務原市
62	磯辺王塚古墳	愛知県豊橋市
63	茶臼山古墳	愛知県豊橋市
64	馬越長火塚古墳	愛知県豊橋市
65	金山二子塚古墳	長野県飯田市
66	里原1号墳	長野県下伊那郡喬木村
67	神田古墳	静岡県磐田市
68	団子塚9号墳	静岡県袋井市
69	大門大塚古墳	静岡県袋井市
70	宇洞ケ谷横穴墓	静岡県掛川市
71	若王子21号墳	静岡県藤枝市
72	白砂ヶ谷D-2号墳	静岡県藤枝市
73	越ケ谷B-3号墳	静岡県藤枝市
74	瀬名3号墳	静岡県静岡市
75	伊庄谷南谷9号横穴墓	静岡県静岡市
76	石川T3号墳	静岡県沼津市
77	平林2号墳	山梨県笛吹市
78	白石古墳群(白石18号墳)	埼玉県児玉郡美里町
79	御堂坂2号墳	埼玉県本庄市
80	白石二子塚古墳	群馬県藤岡市
81	綿貫観音山古墳	群馬県高崎市
82	剣崎大塚古墳	群馬県高崎市
83	前二子古墳	群馬県前橋市
84	生実町帝盤の古墳	千葉県千葉市
85	亀塚古墳	千葉県富津市
86	駄ノ塚古墳	千葉県山武市
87	城山1号墳	千葉県香取市
88	後田4号墳	千葉県香取市
89	山根前横穴墓群	宮城県登米市

※ 表は長滝2002、安永2006・2012を元に作成

第11図　斑点文トンボ玉出土古墳 分布図

大分県の古墳時代鉄鏃（１）－小迫２号墓出土鉄鏃の検討－

西　貴史

はじめに

本稿は、小迫墳墓群第２地区２号土壙墓出土の鉄鏃に着目し、年代的に位置づけることを目的に検討する。確認できた鉄鏃形式のうち、鳥舌鏃（ちょうぜつぞく）に関しては、古墳時代中期[(1)]前半に特徴的な副葬品であり、畿内地域とのつながりを示すものである。大分県内での鳥舌鏃の類例を挙げ、その分布について述べたい。

１．小迫墳墓群の概要

小迫墳墓群は、大分県日田市小迫ほかに所在した、古墳時代の墳墓群である。遺跡は日田市内、朝日ヶ丘丘陵の北側斜面に広がる。近隣では、小迫辻原遺跡をはじめ、古墳時代の墳墓や遺跡が確認できる。小迫墳墓群では、古墳のほか土壙墓や石棺墓、横穴墓など各種の墓制が確認されており、長期にわたり墓域として利用されたことが明らかになった。そのうち第２地区では、粘土槨を有する円墳に隣接して土壙墓５基が確認された。今回検討する２号土壙墓（以下、小迫２号墓と呼称）は、土壙を安山岩質の板石で覆う石蓋土壙墓であり、土壙墓内外で多くの鉄製品を検出した。土壙墓外から鉄鏃・鉄斧・刀子が、土壙墓内からは鉄鏃の他、鉄製刀剣が出土した（図２）。報告書では小迫２号墓の構築年代を４世紀後半から５世紀前半代に位置づけたが［小柳編 1995：p. 21］、副葬品の詳細な観察や検討はなされておらず、判断根拠に不安を残す。まずは出土点数の多い鉄鏃を観察し、年代的な位置づけを試みたい。

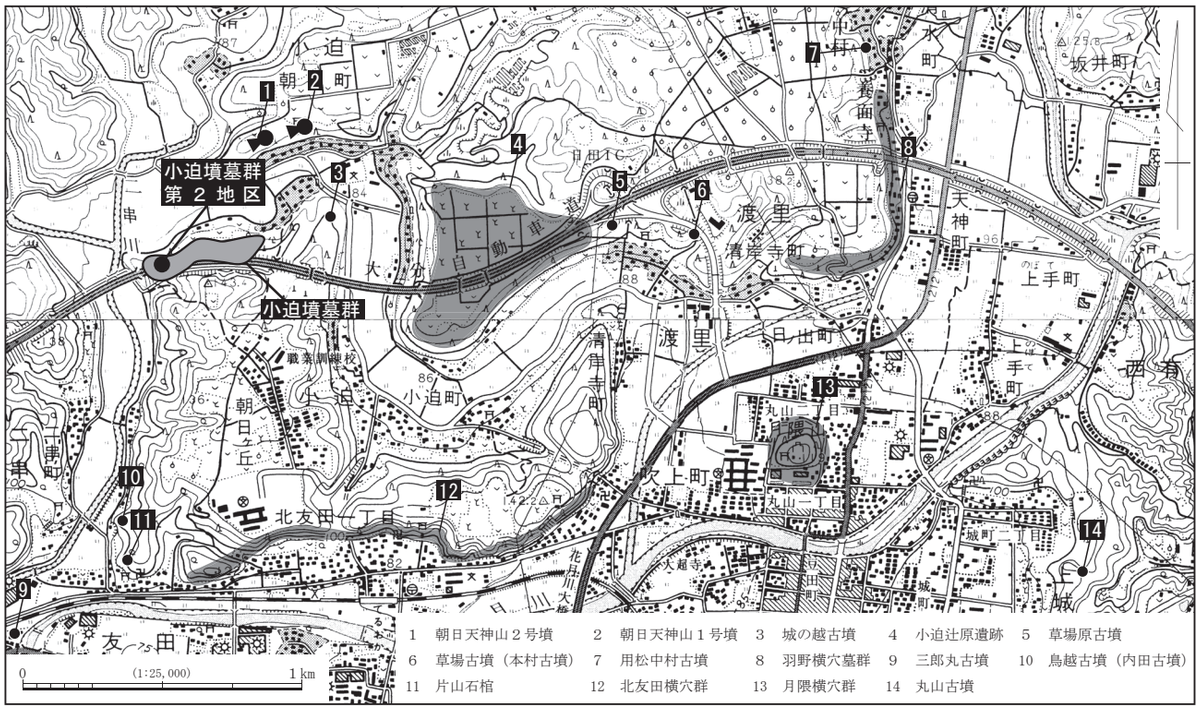


図１　小迫墳墓群の位置と周辺地形

２．小迫２号墓出土鉄鏃の観察と類例

先述のとおり、小迫２号墓の土壙墓外から鉄鏃６点、土壙墓内から鉄鏃 20 点が出土した（図２）。今回の検討にあたり、出土鉄鏃のうち、形状が明瞭に判別できる６点の再実測を行なった（図３）。これらは鳥舌式と方頭式に分類できる（以下、鳥舌鏃および方頭鏃と呼称）。いずれの個体も全体的に銹に覆われるが、形状の遺存状態は良好である。以下、図３の番号順に観察結果を示す。

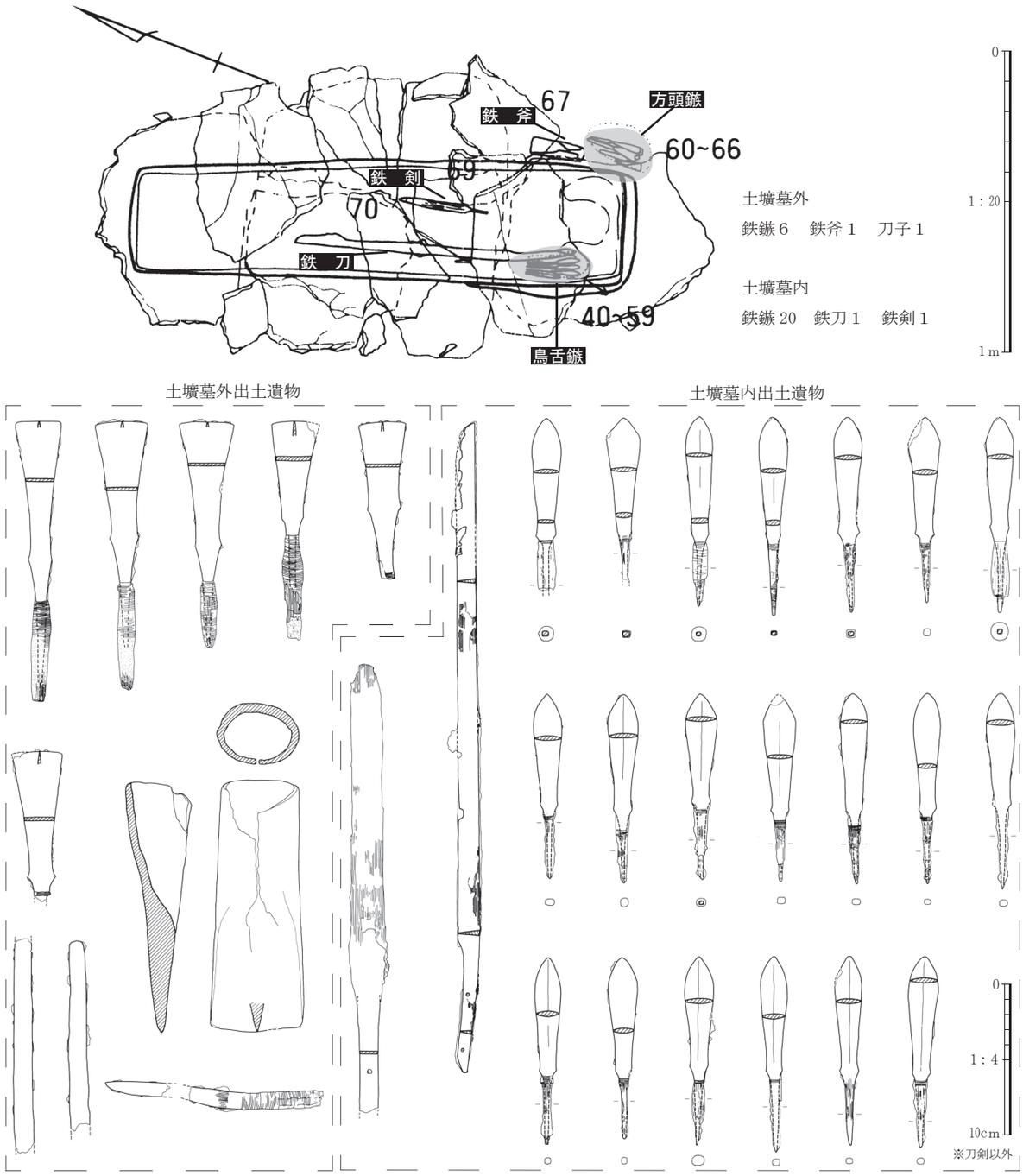


図２　小迫２号墓出土状況と副葬品構成

（１）鳥舌鏃（図３・１－３）

図３・１－３は鏃身下半部から茎部にかけ山形の突出部を有する柳葉鏃、いわゆる鳥舌鏃である。すべて土壙墓内から出土した。

状態・法量　若干刃部を欠損するものの、ほぼ完形品である。いずれも残存長は13cm前後である。重量は23g前後である。

形状・形態　刃部は先端から研出しており、山形突起[2]上部付近で不明瞭になる。１・２のように鏃身中央部を鎬状に研磨したような稜線を確認できるものと、３のように稜線の見受けられないものの２群に分けることができる。いずれも茎の断面形は方形である。１の茎には矢柄及び口巻が残存しており、樹皮などを仕上げに巻いたと思われる。残りが良くないため、巻の施された範囲や巻き方は判然としない。また、矢柄部への漆や彩色は確認できない。図示した３点以外も形状に大きな差は見られず、規格性をもつといって良いと思われる。いずれの個体も先端から山形突起までＳ字カーブをなすが、山形突起の発達がそれほど強くない印象を受けた。

（２）方頭鏃（図３・４－６）

図３・４－６は平根系の方頭鏃である。すべて土壙墓外から出土した。いずれの個体も鳥舌鏃同様、山形突起を有する。

状態・法量　若干の歪みはあるが、形状をよく残している。完形であると思われるが、矢柄など有機物がよく残っているため、全長や茎端部を確認することはできなかった。矢柄も含めた残存長は15～18cm、重量は40g前後である。

形状・形態　刃部は先端のみ研ぎ出され、直線をなす。鏃身部に鎬などは確認できず、大型で扁平な印象を受ける。銹化により確認しにくい箇所もあるが、鏃身部の断面形は長方形である。矢柄などの有機物が良好に観察でき、巻なども確認できる。４や５のように口巻の残りの良いものを観察すれば、巻の範囲は矢柄先端から３cmほどであったと想定できる。鳥舌鏃と同じく、漆や彩色は確認できない。Ｘ線による観察はできなかったが、実見の限り鏃身部に穿孔や線刻は見受けられない。

（３）小迫２号墓出土鉄鏃の類例

鳥舌鏃は、古墳時代中期前半、全国的に出土する形式である。類例も数多く存在するため、枚挙に暇がないが、畿内の百舌鳥･古市古墳群を中心に、九州でも福岡県月岡古墳など各地で副葬が確認される。

方頭鏃は古墳時代を通じて確認できる形式であるが､山形突起を有するものは多くない。管見の限り、兵庫県茶すり山古墳第一主体で出土した方頭鏃が形状的に最も共通する［岸本編2010］。茶すり山古墳のものは、鏃身部に穿孔を有するが、観察の限り、小迫例では確認できなかった。

３．小迫２区２号墓鉄鏃の年代的位置づけ

前章までの観察により、鉄鏃の型式や類例を確認することができた。鉄鏃を含め、小迫２号墓の副葬品の年代的な位置づけを行ない、構築年代について検討しよう。

鉄　　鏃　いずれも中期前半の資料として評価できる。鳥舌鏃に関しては、時期が下るにつれ長身化する傾向にあるが、一括資料内でも個体差が大きいため、細かな時期の絞り込みは避けておきたい。山

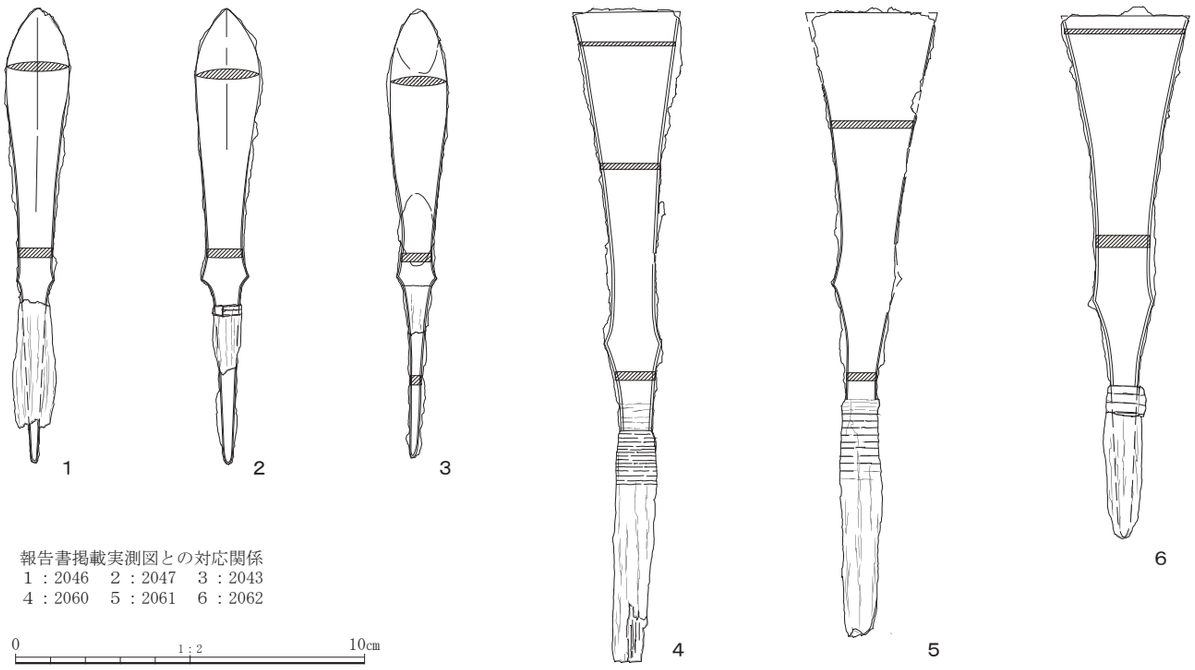


図３　小迫２号墓出土鉄鏃実測図

形突起を有する方頭鏃は類例が少ないが、茶すり山例との共通性を考えれば、中期前半に収めても問題ないと考える。

刀　　剣　鉄刀は、茎尻が隅切尻であり、刃幅が２．８cmであるため、齋藤分類の３ａ式に該当する［齋藤 2017］。隅切尻の茎を有する鉄刀は古墳時代中期初頭に成立するとされており、小迫例も当該期以降のものに当てはめてよいと考える。刀剣類は有機質部材による変遷や年代観が有効であるが、小迫例は把や鞘など有機物が明瞭に確認できないため、これ以上は検討できなかった。

鉄　　斧　肩をもたない鍛造の有袋鉄斧である。袋部の折り返し端部が刃部境界に位置することや、袋部の縦断面形状が徐々に厚みを増すなどの特徴から、金田による製作技法の分類のＡ技法に該当する［金田 1995］。Ａ技法を用いた有袋鉄斧は、古墳時代を通じて製作されたと考えられ、他の副葬品との年代的な矛盾はない。

小　　結　上述の検討から、大まかに年代を絞り込めば、古墳時代中期前半に位置付けできると考える。小迫２号墓の構築年代は、４世紀末葉から５世紀前葉[(3)]の間に収まると評価できるだろう。報告書での時期評価とそれほど差はないものの、副葬品の観察に基づき年代的な位置を与えられたことは意味があるだろう。

副葬位置　出土状況を見ると（図２）、土壙墓内に鳥舌鏃が、外に方頭鏃が副葬されたことが確認できる。鉄鏃のかたちの差を明確に区別して副葬したものと想定できる。また、それぞれの形式の出土位置もまとまっているため、束ねられた状態であっただろう。次節で述べるように、鳥舌鏃は畿内中央からもたらされた可能性が高い鉄鏃であり、畿内との結びつきを示す遺物である。土壙墓内という、より被葬者へ近い位置に束の状態で副葬されたことは、鳥舌鏃の価値や性格を表している可能性があるだろう。一方で、類例が少ない方頭鏃の出土は、在地での流通が想定しにくく、中央とのつながりが想定できる鉄鏃である。鳥舌鏃と来歴は似るものの、土壙墓内外という扱いの差は鉄鏃としての性格の差、葬送儀礼における儀仗性の差を感じさせる。

４．鳥舌鏃の研究動向と大分県内の分布状況

前項では、小迫２号墓出土鉄鏃の観察と年代的位置づけを行なった。そのうち、鳥舌鏃に関しては、副葬時の扱いの差、副葬点数の多さなど、興味深い事例である。そこで、大分県内における鳥舌鏃の分布や特徴はどのようなものかを検討してみたい。

まず、鳥舌鏃の研究動向を概観し、現状、鳥舌鏃はどのように理解されているか確認しよう。

（１）鳥舌鏃の研究動向

鳥舌鏃の形状や変遷観、史的意義については、鈴木一有が精力的に研究を進めた［鈴木 2000・2003 ほか］。鈴木の研究をベースに、さまざまな角度から鳥舌鏃への検討が深められている。

変　遷　変遷に関しては、時期が下るとともに長身化すると指摘される一方、同資料群内の個体差も認められるとして［田中 1999、鈴木 2003］、長身化を「ゆるやかな傾向」として捉える状況[(4)]にある［川畑 2015 ｂ］。時期によって長身化する部位に違いがあるとも指摘されており［池田 2022］、細かな形態差を個別資料だけでなく、全国的な視野で再検証する必要があるだろう。

意　味　鈴木は、鳥舌鏃を「中央政権が積極的に配布した」と想定し［鈴木 2003：pp. 51］、政治的な結びつきを示すものであると位置づける。また、個体差が生じる背景について、靫などに収め「見せる鏃」として視覚的効果をもつことを目的とした、意識的な作り分けを想定した。鈴木の見解はおおよそ支持されているが、近年、木村理により異なる見解が示された［木村 2022］。木村は、ベンショ塚古墳のように同一資料群内での個体差が少ない事例から、「鳥舌鏃が個体差をもつことを前提としているわけではなかった」と考えた。また、個体差を有意に考えるなら、時期差に加え、製作集団差を想定できるとも指摘した。木村は生産や流通の背景をより複雑に考えており、これまでの鳥舌鏃への理解をさらに高めたものといえよう。

（２）大分県内での鳥舌鏃の分布

大分県内での鳥舌鏃の出土は、９遺跡で確認できる（図４、表１）。

偏 在 性　分布図を見れば、県内でも特定の地域に偏って出土することがわかる[(5)]。日田盆地、玖珠盆地、宇佐平野、海部地域に集中しており、首長墓の動向と関係するものと思われる。また、出土が墳丘を有する古墳以外からもみられる点について注意したい。

組 合 せ　地名表には、時期的な位置づけが可能な副葬品を項目として設けたが、良好な組合せを示す例は少ない。鉄鏃組成は、基本的に２～３種類ほどで構成されており、短頸鏃や長頸鏃を含む事例があることに注意したい。

出土本数　出土地のうち、鳥舌鏃を５本以上出土したのは、日田盆地の小迫２号墓と草場第二 192 号墓である。他の墳墓が２～３本ほどしか所有しないのに対し、この２例は 20 本以上所持する点で隔絶する。鳥舌鏃が中央との関係性のもとにもたらされたものという認識にたてば、これらの墳墓被葬者は、畿内との交流を持つ人物であったと推定できるだろう。草場第二 192 号墓では、棺内で検出された人骨の分析から５体の埋葬が確認されているため、数回の追葬が想定されている。したがって、副葬品が複数の機会にわたって継続的に入手され[(6)]、被葬者ごとに鳥舌鏃が副葬された可能性も考えられる。同一機会にしろ、複数機会にしろ、畿内との交流を考える上で非常に興味深い。

表１　大分県内における鳥舌鏃出土地名表

出土遺跡		号数	所在地	墳形	埋葬施設	鉄鏃				刀剣		板甲		鎌		鍬鋤先		刀子		その他
						鳥舌	短頸	長頸	その他	剣	刀	革綴	鋲留	直刃	曲刃	方形	U字	片関	両関	
1	小　迫	２区２号	日田市小迫ほか	方周	石蓋土壙	●			方頭●	○	○							？		鉄斧
2	草場第二	192号棺内	日田市渡里	方周	箱式石棺	●	○		剣身○	○	○							○		玉、櫛
	草場第二	192号棺外	日田市渡里			○		○												
3	夕　田	１号主体	日田市西有田	円墳？	箱式石棺	○				○					○		○			
4	おごもり	３号主体	玖珠町大隈	方周	箱式石棺	○			剣身？		○					○		○		馬鐸、金環
5	楪	１号	九重町野上	－	箱式石棺	○			圭頭	○									？	鉄斧、櫛
6	葛　原		宇佐市葛原	円墳	竪穴系横口式石室	？		？				○								冑、玉類など
7	京　塚	７号	宇佐市川辺	円墳	石蓋土壙	○	○											○		櫛、耳環
8	恵良野	７号	宇佐市川辺	方墳	石蓋土壙	○	○	○	腸抉		○							○	○	
9	臼　塚		臼杵市稲田	方円	舟形石棺	○				●	○	○								鏡、貝輪、鉾

凡　例　墳形｜方周＝方形周溝墓、方円＝前方後円墳

点数｜●＝５点以上出土、○＝５点未満出土、？＝可能性があるもの

※臼塚に関しては、検出した２基の石棺のうち、どちらに帰属するか明確でない

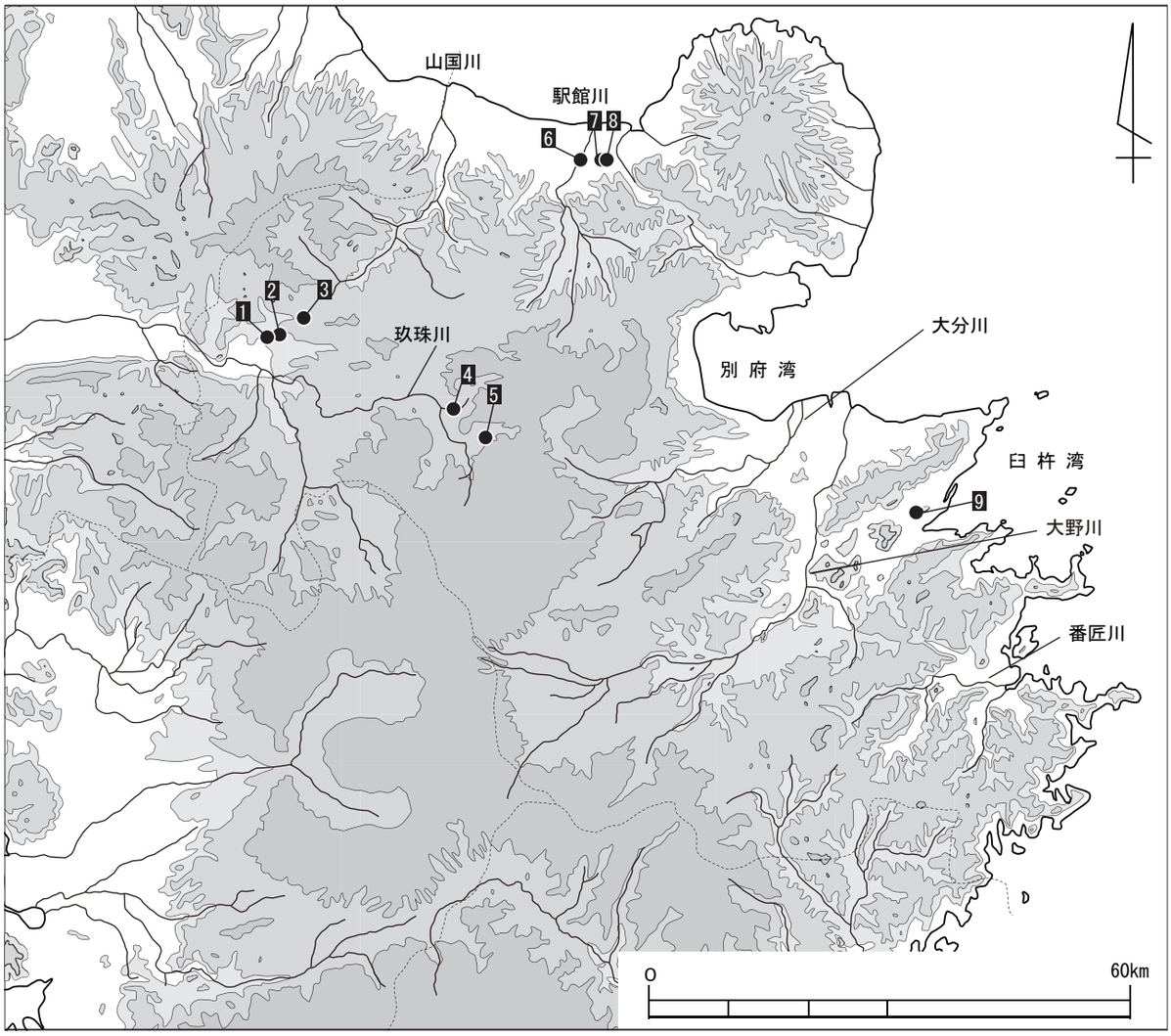


図４　大分県内における鳥舌鏃の分布

おわりに

本稿では、小迫２号墓出土鉄鏃の年代的位置づけを行ったのち、県内から出土した鳥舌鏃の類例を集成した。地名表程度の内容であるが、基礎資料を示せたことに意義を見出したい。しかし、挙げた類例すべての資料観察も行えず、九州諸地域との比較や畿内との関係性について明確に述べることができなかった。鳥舌鏃をはじめとした鉄鏃への見識を深め、別の機会に論じることとしたい。

大分県内の鉄器研究は決して盛んとは言えず、位置づけのなされていない資料や未公開の資料が数多く残っている。基礎資料を提示し、検討材料を増やしていく必要があるだろう。鉄鏃研究はかたちの分類だけでなく、有機質部材の検討も含めた生産・流通論まで発展しつつある［川畑 2015、平林 2018］。今後は鉄鏃だけでなく、施される有機質部材を含め検討していきたい。

｜註｜

（１） 本論で扱う「古墳時代中期」とは、帯金式甲冑の成立から終焉までを対象とする［橋本 2005、岩本 2022 など］。

（２） 鳥舌鏃の鏃身下半部に施される山形の突出部については､関として認識する立場［池田 2022 ほか］と装飾として認識する立場［鈴木 2003］に分かれる。筆者としては、関としての機能を否定するものではないが、山形突出部のすべてが関として機能していると思えないため、本文では鈴木に倣い、「山形突起」と呼称する。

（３） 古墳時代中期の実年代観は岩本崇の検討を参考にした［岩本 2022］。細かな年代観を多様な器物との組み合わせから導き出し、暦年代まで言及している。

（４） 川畑は、鳥舌鏃の大きさの変化が衝角付冑の変遷と整合的だとしている［川畑 2015 ｂ］。

（５） もちろん、出土の偏在性は発掘調査の頻度によって異なる。

（６） 機会を分け入手した可能性がある資料として、棺外（石蓋上）で検出した鳥舌鏃片もその証左となりうる。鏃身が著しく長身化しており、棺内のものとは明らかに異なる。また、長頸鏃の頸部と想定できる破片資料も確認できる［高橋編 1992］。鳥舌鏃は破片であるが、福岡県月岡古墳や大阪府野中古墳のものに類似するといえる。どちらも長頸鏃出現段階（古墳時代中期中葉、須恵器 TK217 型式段階）と評価されており、草場棺外例も時期をそう違えないものと考える。今後、観察を行い、詳細に検討したい。

｜参考・引用文献｜

池田　旭　2022「盾塚・鞍塚・珠金塚古墳出土資料からみる鳥舌式鉄鏃の変遷について」『関西大学博物館紀要』28　関西大学博物館　pp. 33-51

岩本　崇　2022「中期古墳年代論－相対編年とその暦年代－」『中期古墳研究の現状と課題Ⅵ－新編年で読み解く地域の画期と社会変動－』 中国四国前方後円墳研究会　pp. 1-19

金田善敬　1995「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』17　古代吉備研究会　pp. 61-79

川畑　純　2015a『武具が語る古代史－古墳時代社会の構造転換－』プリミエ・コレクション 60　京都大学学術出版会

川畑　純　2015b「五條猫塚古墳出土鉄鏃の製作系譜と編年的位置づけ」『五條猫塚古墳の研究』総括編　奈良国立博物館　pp. 341-350

木村　理　2022「ベンショ塚古墳出土鉄鏃の評価」『ベンショ塚古墳発掘調査報告書』奈良市埋蔵文化財調査報告６　奈良市教育委員会　pp. 85 － 87

齊藤大輔　2017「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰ－広域編年と地域編年の齟齬－』 中国四国前方後円墳研究会　pp. 73-88

鈴木一有　2000「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』第７回鉄器文化研究集会発表要旨集　鉄器文化研究会　pp. 75-94

鈴木一有　2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『中期古墳の諸様相』帝京大学山梨文化財研究所研究報告 11　帝京大学山梨文化財研究所　pp. 49-70

田中新史　2004「古墳時代中期前半の鉄鏃（三）－中枢域の事例分析－」『土筆』８　土筆舎　pp. 505-599

橋本達也　2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論－松林山古墳と津堂城山古墳から－」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』 大阪大学考古学研究室　pp. 539-556

平林大樹　2018「古墳副葬矢鏃の分析視角」『古代武器研究』14　古代武器研究会　pp. 103-115

｜報告書｜（本文で言及した遺跡及び地名表作成に用いたもの）

［県外］

盾　　塚　末永雅雄　1991『盾塚　鞍塚　珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会

茶すり山　岸本一宏編　2010『史跡　茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告 383　兵庫県教育委員会

月　　岡　児玉真一編　2005『若宮古墳群Ⅲ－月岡古墳－』吉井町文化財調査報告書 19　吉井町教育委員会

［県内］

葛　　原　小倉正五・佐藤良二郎　1989「葛原古墳再考」『古文化談叢』20・下　九州古文化研究会　pp. 111-127

臼　　塚　臼杵市教育委員会編　2018『臼杵の古墳』 臼杵市教育委員会

おごもり　渋谷忠章編　1977『おごもり遺跡調査概報』 玖珠町教育委員会

楪　１　号　牧尾義則　1981「九重町大字野上出土の石棺について」『玖珠郡史談』３　玖珠郡史談会　pp. 2-6

夕　　田　友岡信彦編　1999『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 14　大分県教育委員会

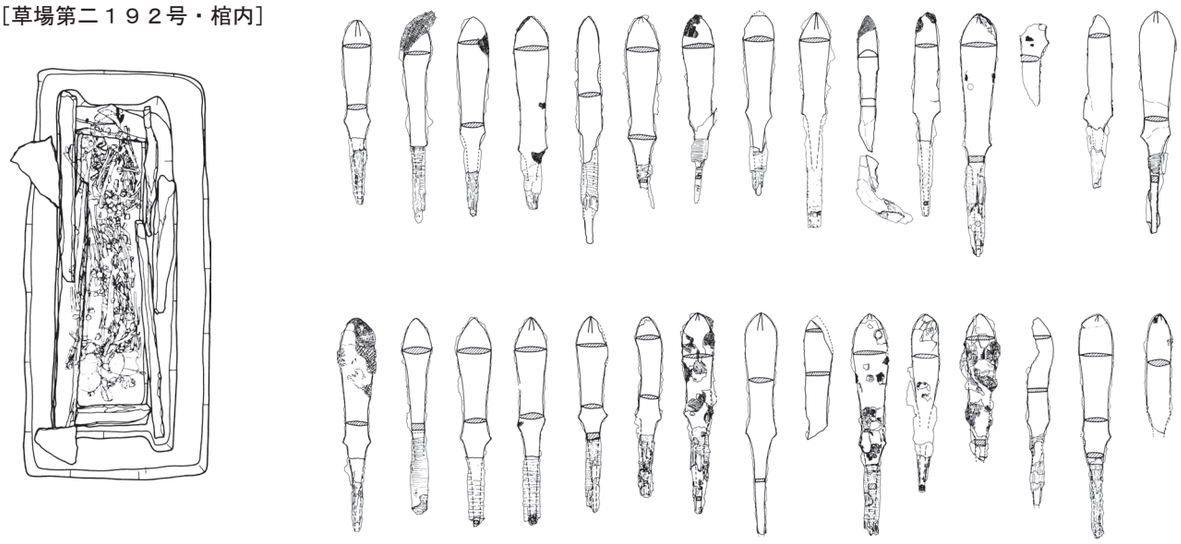
草場第二１９２号　高橋徹編　1989『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書１　大分県教育委員会

小迫２号　小柳和宏編　1995『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書３　大分県教育委員会

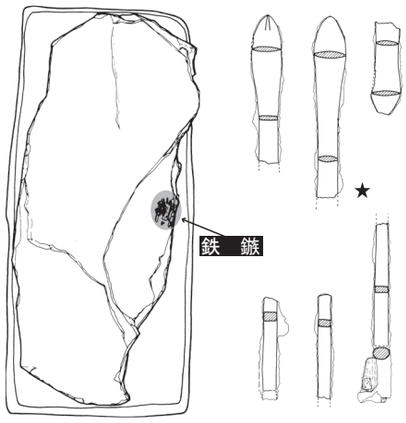
京塚７号　高橋徹・綿貫俊一編　2011『川部・高森古墳群発掘調査報告書』 大分県立歴史博物館

恵良野７号　高橋徹・綿貫俊一編　2011『川部・高森古墳群発掘調査概報』 大分県立歴史博物館

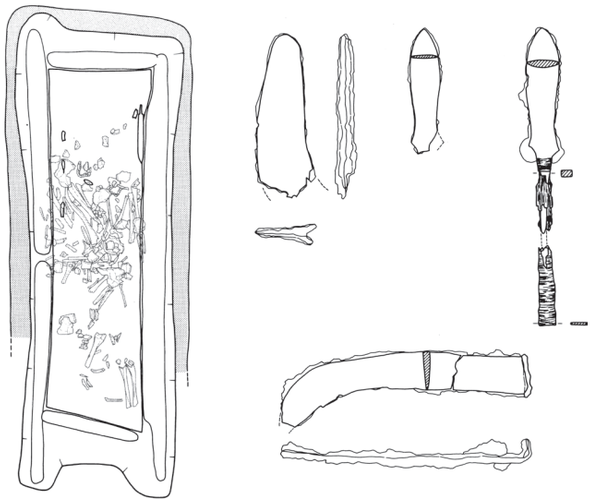
［草場第二１９２号・棺内］



［草場第二１９２号・棺外］



［夕田１号］



［おごもり３号］

鳥舌鏃の可能性が高いものについては、図下部に★を付け示した。
また、他の副葬品も参考として示したが、出土品全てではない。

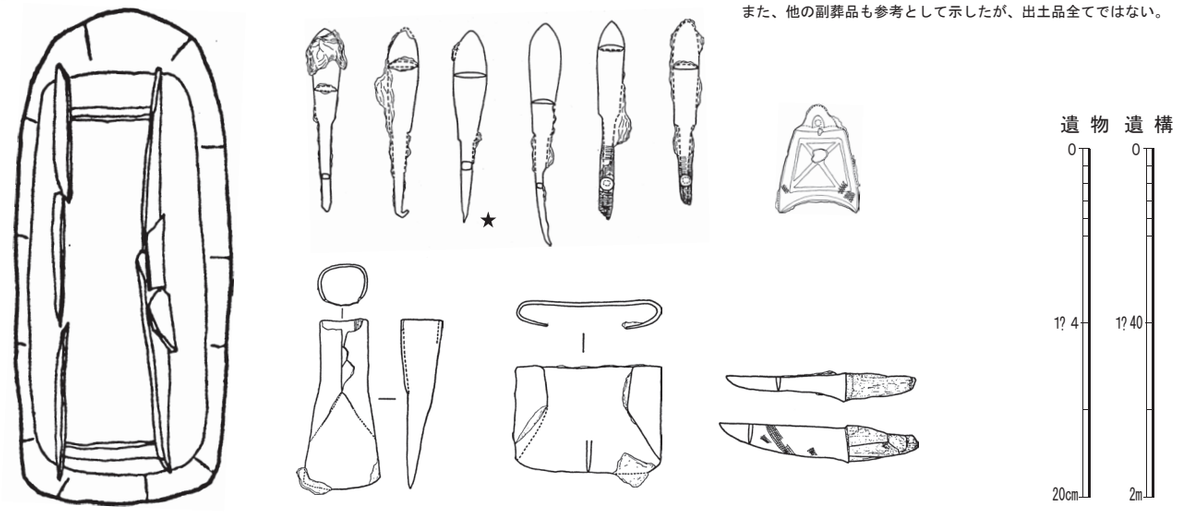


図５　大分県内出土鳥舌鏃（１）

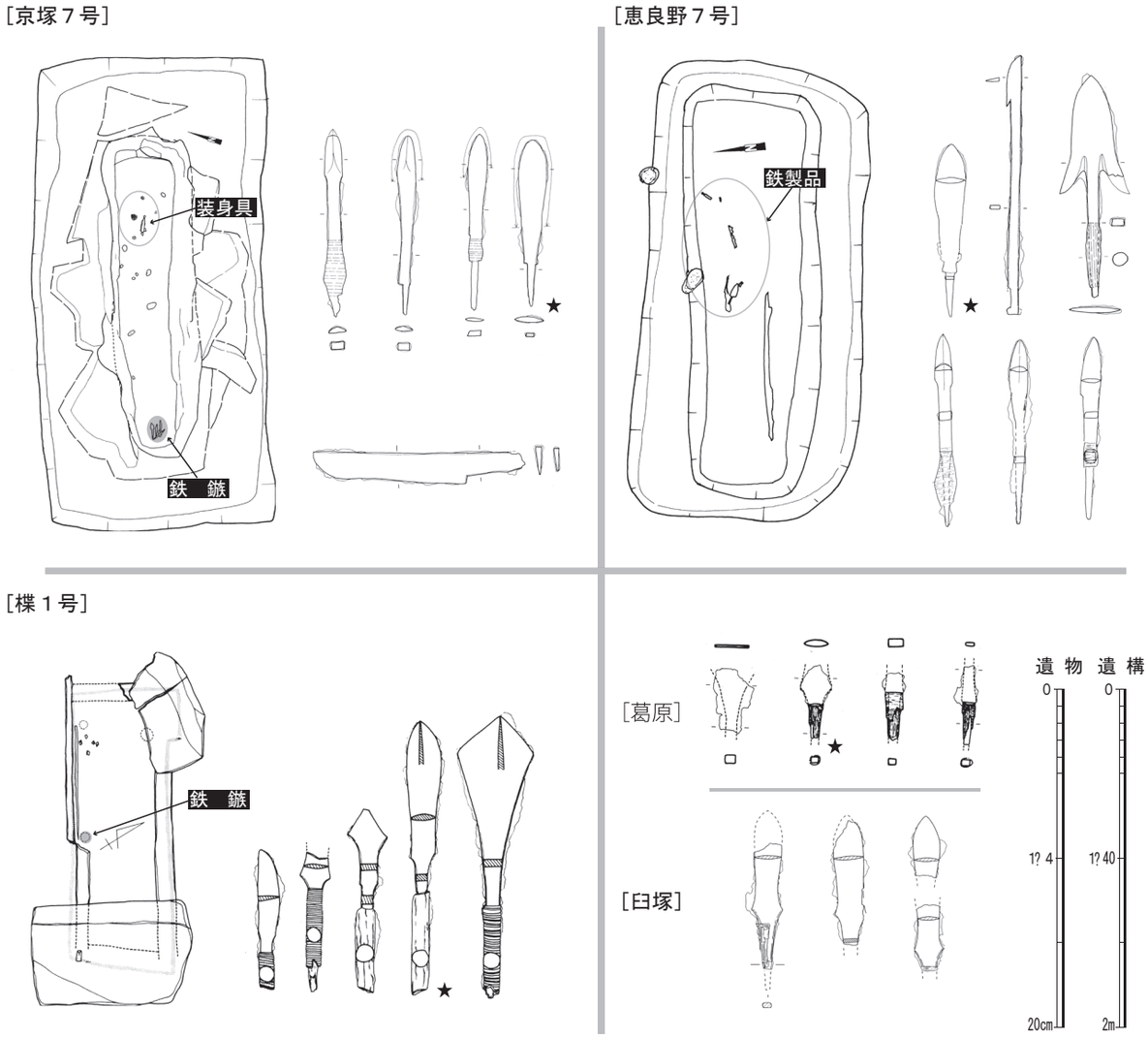


図６　大分県内出土鳥舌鏃（２）

願成院の密教仏画総覧 1

綿貫俊一

序

高野山真言宗愛宕山願成院は、大分県竹田市大字竹田に所在する寺院で、江戸時代の豊後国岡領約7万石の領内における工事の安全や天災回避に伴う公的な加持祈祷、さらには各種の灌頂を執り行う祈祷寺として元和4年(1616)に建立された真言宗の寺院である。そのため、領主である中川氏の崇敬も厚く、最も重要な寺として岡城に連なる北側尾根上に建てられ保護されてきた。

一方、愛染堂は前からあった大勝院の敷地に岡領二代領主中川久盛公の命により寛永12年（1635）に建立された。大勝院は安土桃山時代の文禄年間(1592～1596)には既に建てられ、金剛寺という寺号だったといわれる。その後、荒廃し、江戸時代になって中川久盛公が整備している。

時は移り、明治時代の初年に出された神仏判然令(神仏分離令)により、廃仏毀釈が始まり、仏教界は大きな試練を迎えた。これに伴い明治3年(1869)、岡藩知事であった中川久成の指示で、既に廃寺になることが決まっていた大勝院の地に移転することになった。こうして明治8年(1875)の2月に大日如来が本尊として大勝院の大堂であった愛染堂に遷座し、願成院の大日堂として再出発しました(現在は古くからの呼称である愛染堂として人々に親しまれている)。一時は、廃寺や大恩寺(現豊後大野市朝地町所在の寺)との統合という話もあった願成院であるが、関係者の努力で存続が決まることになった。明治14年(1881)中には隣接する観音寺の住職が願成院の住職を兼務するようになり、今日に続いている。

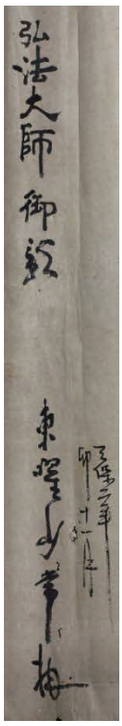
創建から永く地域の安寧を司ってきた願成院は、これまで大きな天災にまみえることはなかった。それを物語るように様々な加持祈祷や灌頂などの秘儀にかかわる多種多様な仏像・仏具・仏画などの什物が残されている。その中には、高野山・仁和寺・醍醐寺などの大寺との関係を物語るものや、慈雲飲光阿闍梨(慈雲尊者)・洞泉性善阿闍梨などの高僧に由来するもの、また京都長谷川派や森田重三郎易信、さらには六角堂能満院の憲海などの絵師に関係する仏画等、実に興味深い資料が残されている。このように多くの什物が現在まで残されている寺院は県内にはない。歴代住職による並々ならぬ什物管理がうかがえる。

さて今回は、願成院に数ある什物のうち仏画を総覧する図録台帳を制作した。全ての仏画を写真撮影し、基本的に全景写真を掲載した。これによって仏画の傷み具合などの現状を把握することができる。これに加え、箱書き、表装裏の墨書、落款、付属文書などの記録写真を必要に応じて掲載している。これらには仏画の寄付者、絵師名、制作の経緯、年代、寺院名、僧侶名等が記されている場合があり、仏画の由来等を示す重要な情報が含まれている。また本稿の末には写真と対応する一覧表を付した。これには仏画の規模、材質、旧所蔵寺院名、残存状況などの情報を集約した。とりわけ旧所蔵寺院名については、願成院が明治初頭に廃寺になった不動院・泉福寺・大勝院の什物を継承している部分がある。更に明治14年から観音寺と願成院を同じ住職が兼務していることから什物の本来的な帰属が不鮮明になっている。そのため、箱書や掛幅に記された寺院名・僧侶名･山号名、什物帖に記された掛幅名を考慮して本来所蔵していたであろう寺院名を可能な限り特定した。

以上のような経緯から制作したこの総覧によって、仏画研究の進展と、今後の仏画保護に資することを意図している。

なお、今回は紙面の都合で、全体の半分程度しか紹介できず、また所蔵仏画目録も次回紀要に掲載することになったことをご容赦願いたい。

1 弘法大師像 甲本　紙本



江戸・天保2年(1831)　本紙
141.0×122.8
※「天保二年」(1831)
※「東曜山」は、願成院文書(A-27)「許可灌頂印信授與祐遍大法師」によると「阿州東曜山蔵珠院」とある。現在の「徳島市国府町芝原宮ノ本三」にある寺院。

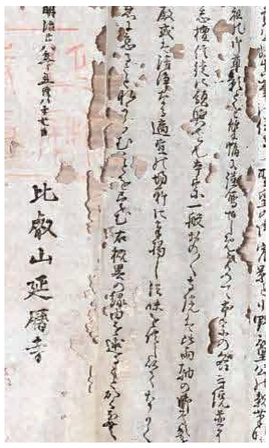
2 伝教大師(桓武天皇・伝教大師像一具)　紙本

3 桓武天皇像(桓武天皇・伝教大師像一具)　紙本

※二・三の「桓武天皇・伝教大師像一具」は、天地・柱・一文字・本紙部分全てが一枚の紙に印刷されている。

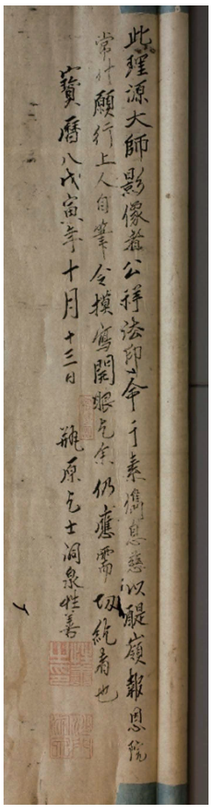
《二～三》　付属品

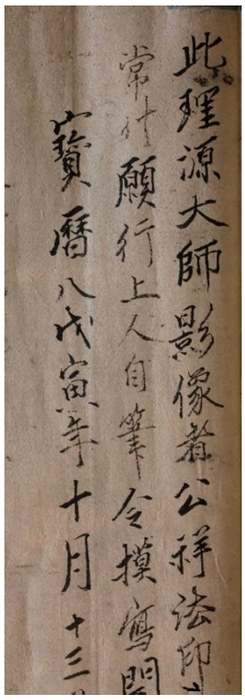
(拡大)

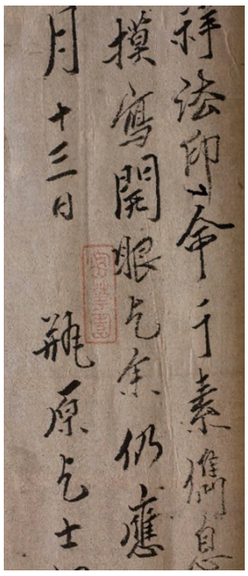


明治28(1895)年銘

4 理源大師像 甲本



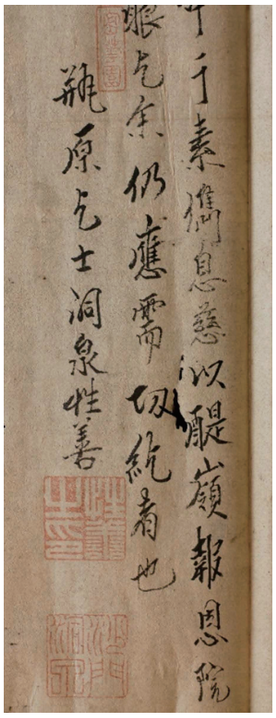


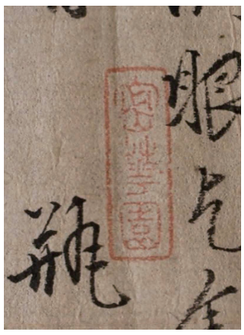


※「瓶原乞士 洞泉性善」は、醍醐寺の報恩院流の次第相承を授受

※ なお洞泉性善は、東大寺の真言院・戒壇院の長老を務める。

江戸・寶歴 8 年(1758) 本紙126.4×64.2





冠帽印　縦4.0cm×横 1.3cm
白文方印　縦3.85cm×横 3.8cm
朱文方印　縦3.9cm×横 3.8cm

5 願成院十世慧眼法師肖像

江戸 19世紀初頭　本紙96.9×39.5

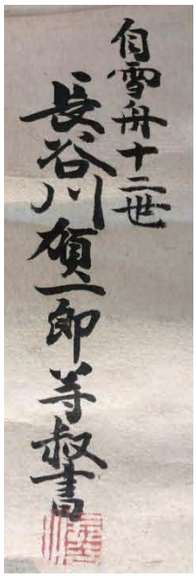
6 弘法大師絵伝(双幅一)　絹本

江戸 文政 12 年(1829)　本紙155.8×132.0

※「長谷川賀一郎」は長谷川賀一郎等叔のこと。

7 弘法大師絵伝(双幅二)　絹本

江戸 文政 12 年(1829)　本紙155.8×132.0



白文方印　縦1.8cm
横2.0cm
「長谷川」

※等叔の墨書と白文方印(長谷川)は、絵伝後半(双幅二)の表装裏に記される。

8　弘法大師像　乙本　　紙本

江戸　本紙111.0×77.0

9　秘鍵大師像（弘法大師像　丙本）　　紙本(版本彩色)

江戸 19C　中　本紙86.3×54.0
（御誂仏畫目録記載）

※本像は、空海の著作である『般若心経秘鍵』に基づく像容といわれている。

10　弘法大師像　丁本

大正５年(1916) 本紙 76.2×38.2

《弘法大師像丁本（箱書他）》

11　勝敵毘沙門天像　　紙本(版本彩色)

江戸 19C　中　本紙122.3×55.6（箱書他）
（御誂仏畫目録記載）

12　阿字観図　　紙本

江戸ヵ　本紙 52.6×39.4

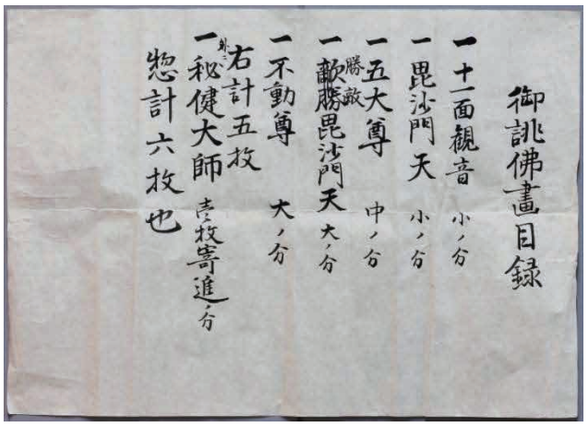
13　不動明王像　丁本
紙本（版本彩色）

江戸 19C 中 本紙 130.8×60.8
（御誂仏畫目録記載）

14　毘沙門天像　丁本
紙本（版本彩色）

江戸19C 中 本紙 54.6×24.0
（御誂仏畫目録記載）

関連文書



御誂佛畫目録
一十一面観音　小ノ分
一毘沙門天　小ノ分
一五大尊　中ノ分
一勝敵毘沙門天　大ノ分
一不動尊　大ノ分
右計五枚
一秘健大師　壱枚寄進ノ分
惣計六枚也

江戸末　法量　縦 27.6×横 37.6

毘沙門天：写真14　毘沙門天丁本
勝敵毘沙門天：写真11
不動尊：写真13　不動明王像丁本
秘健大師：写真9　秘健大師像

※「御誂佛畫目録」は、絵師または問屋、寄付者による寺への「引き渡証」のような意味を有する文書と推定される。

この文書は一括注文制作の仏画が五幅分記される他、寄付分が一幅記載されている。願成院には十一面観音と五大尊（五大明王）が収蔵されているものの、作風や由来が異なり、「御誂佛畫目録」に記載されたものではない。現存し、該当する仏画は目録の下に記したとおりである。

※該当する仏画のうち写真十一勝敵毘沙門天像を納入の箱書きには「金剛所蔵」と記されている。金剛を名乗るのは、幕末期から明治初頭では願成院の金剛祐遍と観音寺の金剛月鑑、明治十年代に観音寺と願成院の住職となった金剛智道である。このうち箱書などの筆跡から金剛祐遍が有力と推定される。

15　両部種子曼荼羅図
己本　　紙本

江戸ヵ　本紙 34.7×18.2

16　十一面観音菩薩像
乙本　　紙本

江戸19C前ヵ　本紙113.0×49.6

17　弘法大師像　戊本
紙本（六角堂能満院製作の版本）

江戸 19C 前　版本 本紙 102.4×45.0

18　宝珠曼荼羅図
紙本（六角堂能満院製作の版本）

19C 前　版本 本紙 91.5×48.5

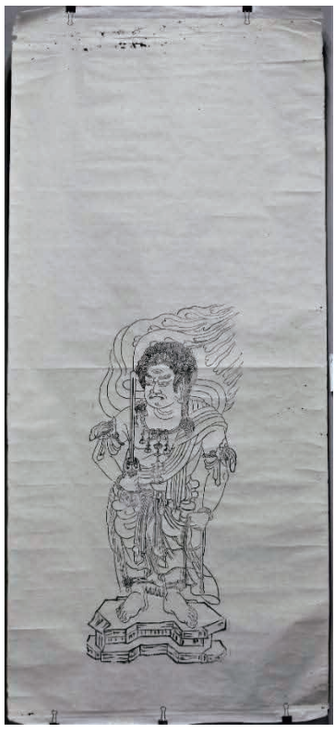
19　十三仏来迎図　丙本
紙本（六角堂能満院製作の版本）

19C 前　版本 本紙 68.4×24.0

20　不動明王像　戊本（版本）
紙本（六角堂能満院製作の版本）

江戸 19C 前 版本 本紙 138.6×64.2
※これと同じ版本が十三不動明王像
丁本の下絵となっている

21 不動明王像 己本(版本)
紙本(六角堂能満院製作の版本)



江戸 19C 前 版本 本紙 139.8×64.2

22 月天像(十二天像 版本)
紙本(六角堂能満院製作の版本)

19C 前 版本 本紙 121.7×41.7

23 地天像(十二天像 版本)
(六角堂能満院製作の版本)

19C 前 版本 本紙 122.4×41.5

24 火天像(十二天像 版本)
(六角堂能満院製作の版本)

江戸19C 前 版本 本紙 121.3×41.5

25 伊舎那天像(十二天像 版本) (六角堂能満院製作の版本)

19C 前 版本 本紙 121.5×41.9

26 毘沙門天像(十二天像 版本) (六角堂能満院製作の版本)

19C前 版本 本紙 121.4×41.5

27　日天像(十二天像　版本)
(六角堂能満院製作の版本)

江戸 19C 前 版本 本紙 121.4×41.9

28　帝釈天像(十二天像　版本)
(六角堂能満院製作の版本)

19C 前 版本 本紙 121.5×41.8

29　水天像(十二天像　版本)
(六角堂能満院製作の版本)

19C 前 版本 本紙 121.5×41.6

30　羅刹天像(十二天像
版本)(六角堂能満院製作の版本)

江戸19C前 版本本紙121.6×41.6

31　梵天像(十二天像　版本)
(六角堂能満院製作の版本)

19C前 版本 本紙 122.5×41.3

32　焔摩天像(十二天像　版本)
(六角堂能満院製作の版本)

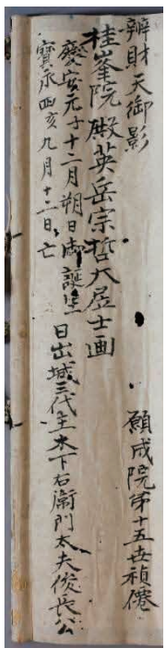
19C前 版本本紙 121.5×41.9

33 風天像（十二天像 版本）
（六角堂能満院製作の版本）

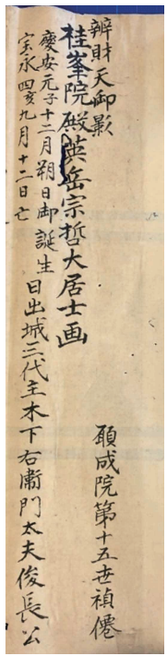
写真17から33までは、江戸時代末期に六角堂能満院を拠点として仏画の粉本製作に明け暮れた憲海（大願）や宗立等による版画である。写真17には、大願が謹刻したことの刻字がある。

江戸 19C 前 版本 本紙 121.5×41.6

35 弁財天像 乙本 紙本



34 弁財天像 甲本 紙本



江戸 18C 前 本紙 111.6×50.4

※「願成院第十五世禎僊」は、元々明明治初頭の廃院まで大勝院の住職を勤めていた禎仙で、古文書や棟札などの記の記録によると明治三十一年(1898)頃、願成院の住職を臨時に勤めていた。願成院住職は、十四世祐遍が遷化後から禎僊が明治三十一年に住職となるまでに三代経過しており、禎僊の代数は「十五世」ではなく、今のところ十八世と推定している。

木下俊長は寛文元年（1661)から宝永四年（1707）まだで藩政を司り、享保元年(1716)に死去した豊後日出藩の第三代領主。俊長と禎僊との年代差から、前者の絵に後者が追記したのだろう。

※本例も木下俊長の作で同じ頃に描いたのだろう。また弁才天像甲本と同様に禎僊(禎仙)が追記したことを示す。禎僊が願成院の住職に臨時的に着くのは明治三十一年(1898)頃なので、その頃追記したのだろう。

江戸 18C 前 本紙 76.6×35.7

36 弁才天曼荼羅図　絹本

江戸　本紙 111.5×60.3
※頭部に宇賀神を載せる。

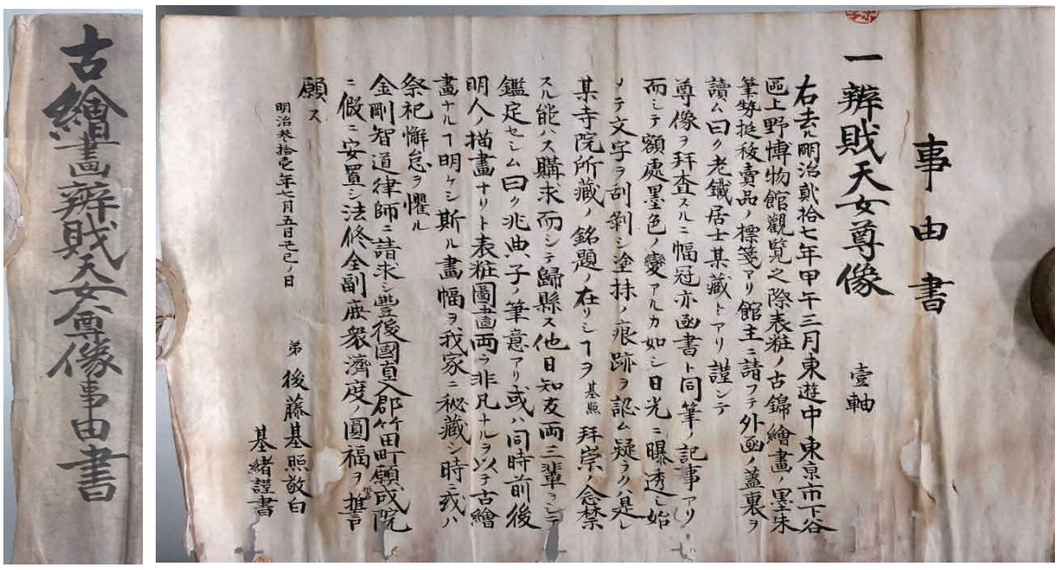
37 弁才天十五童子図　絹本

江戸　本紙 41.6×26.8

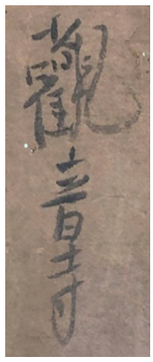
※元、東京の上野博物館(現東京国立博物館ヵ)が収蔵していたとある。

※事由書の「金剛智道」は、明治十四年(1881)頃願成院の住職となり、途中禎僊の臨時住職を経て、再び明治三十六年(1903) 頃まで同職を勤めた。

《弁才天十五童子図の事由書》



38　摩訶迦羅天曼荼羅図　絹本



※観音寺は愛染堂の前に隣接する寺

※月鑑房ヵ
月鑑は観音寺の住職

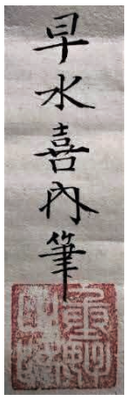
※「※畫工 田近重右衛門」ヵ

江戸　本紙 104.1×49.8

39　水天像（水天像・善女龍王像・八大龍王像）　絹本

江戸 18C 前 本紙 91.1×45.3

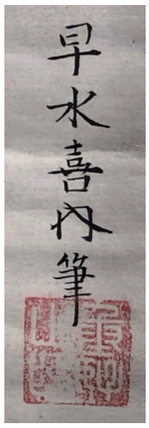
40　善女龍王像（水天像・善女龍王像・八大龍王像）　絹本



※早水喜内の方印は、善女龍王像のほか水天像と八大龍王像にも同様なものがある。

江戸 18C 前　本紙 91.1×45.3

41　八大龍王像（水天像・善女龍王像・八大龍王像）　絹本



《八大龍王の落款》
白文方印
縦 3.0×横 2.9
早水喜内の落款は、八大龍王像の表装裏に記される。

江戸 18C 前　本紙 91.4×45.1

《水天像・善女龍王像・八大龍王像納入の箱書他》

※早水喜内の作は、秋田県龍泉寺に「仏涅槃図」享保三年（1718）がある。

※豊後国岡領主第九代「中川久持」の寄付とあるが、久持の生年は安永五年（1776）である。そのため、早水喜内の活動年代が十八世紀前半と推定され、製作後数十年を経てのものだったと考えない限り、久持の寄付は考えにくい。

43　仏涅槃図　甲本　　紙本版本着色

江戸　文政６年(1823)　本紙 187.5×102.2

42　仏涅槃図　甲本　　紙本版本着色

江戸　　本紙 155.8×132.0

※箱蓋表「月涅槃　周信筆」

※箱蓋裏「諦考院殿御室　鷲峯院殿御遺物　愛宕山常什」

※「愛宕山」＝願成院

※諦考院＝中川久貞（岡領八代領主）

※「鷲峯院」は久貞の正室・久で、甲本は久の遺物である。

※「此本源之圖府内寶戒寺之所蔵呉道玄之真蹟也余曽住持三佐正等院之日画其圖於鶴崎□山以為彼寺之所蔵爾後移住當寺二雖為舊軸破壊言依之模寫斯一軸於此地之真斎願以此功徳與無餘有情界共躋如来圓寂之山　維時文政六未晩春三月第十五世照戒宥英禁識之」

※旧大勝院の従物である。「寶戒寺」は現在大分市上野に所在する金剛宝戒寺である。

44　金剛界曼荼羅図　甲本
(両部曼荼羅図　甲本)　紙本

江戸　本紙 147.2×131.0

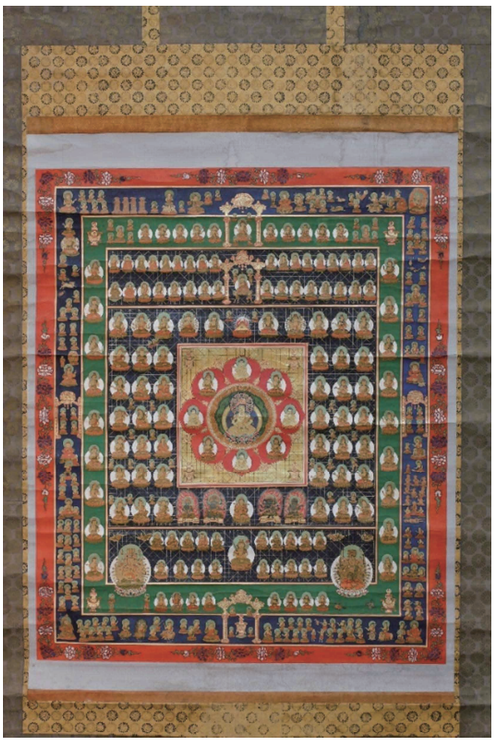
45　胎蔵界曼荼羅図　甲本
(両部曼荼羅図　甲本)　紙本

江戸　本紙 147.2×131.0

46　金剛界曼荼羅図　乙本
(両部曼荼羅図　乙本)　紙本

江戸　本紙 84.4×69.7

47　胎蔵界曼荼羅図　乙本
(両部曼荼羅図　乙本)　紙本



江戸　本紙 83.3×69.5

48　一字金輪仏頂像(大日金輪)　絹本

《箱書》

※「天保五年」(1834)の「高祖大師一千年遠諱・・」に際して描かれた。
※「・・画者京司高橋氏也」とある。
※「禎仙」は、明治初頭の廃院まで愛染堂が属していた大勝院の第十六世住職。
※高祖大師一千年遠諱・・」に大勝院の禎仙が作らせたのだろう。
※大勝院の廃寺に伴い、願成院へ管理が代わったことがうかがえる。

江戸 天保５年(1834)本紙 90.4×57.4

49　五大虚空蔵菩薩像　絹本

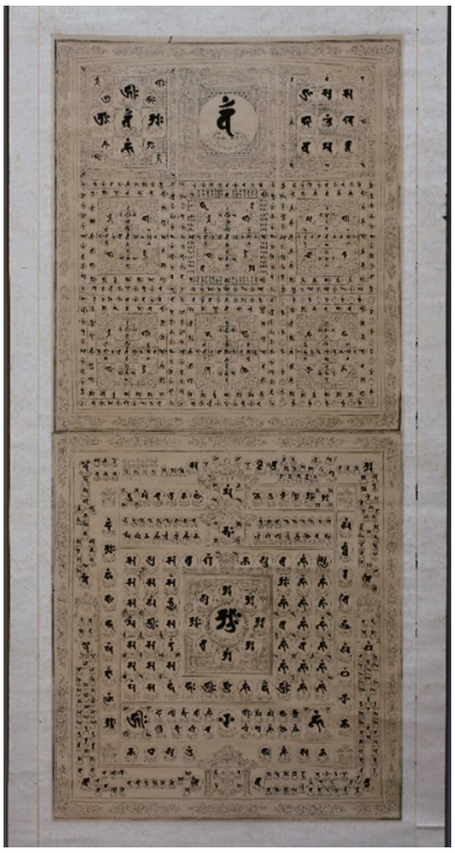
江戸　本紙 116.5×65.1

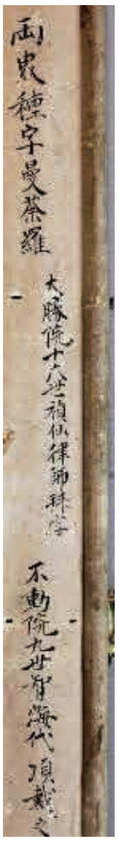
50　星曼荼羅図　絹本

《箱書》

江戸　安政３年(1856)
本紙 128.1×79.3

51　両部種子曼荼羅図 甲本　紙本(版本)





《版木の規模》
金剛界
縦55.8×横49.6
胎蔵界
縦55.6×横50.0

※版本を基に、大勝院十六世禎仙が墨で種子を入れ完成させ、不動院住職に寄付。
※本誌は1枚の紙に刷っている。
※乙本(52)・庚本(171)と同版である。

江戸 弘化３年(1846)
本紙 112.6 ×50.6

52　両部種子曼荼羅図 乙本　紙本(版本)

《版木の規模》
金剛界
縦55.8×横49.6
胎蔵界
縦55.5×横50.1

※版本を基に、大勝院十六世禎仙が墨で種子入れした大勝院の什物。
※本誌における金剛界・胎蔵界は別の紙で刷る。
※甲本(51)・庚本(171)と同版である。

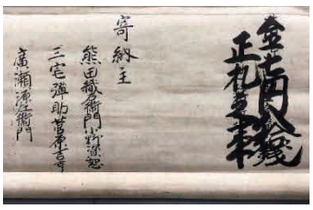
江戸 弘化３年(1846)
本紙 縦118.0×横51.8

53　両部種子曼荼羅図 丙本　紙本(版本)

江戸19C ヵ本紙 101.9×41.1

54　両部種子曼荼羅図 丙本　紙本(版本)

江戸　本紙 109.7 ×41.2



寄納主
熊田織右衛門 小野資怒
三宅彈助 菅原吉亨
廣瀬源左衛門

55　如意輪観音像 乙本(真言五図一具)

紙本(版本着色) 海如筆(長谷寺の僧)

江戸 天保 5 年(1834)版本利用
本紙 60.8×28.0

56　弘法大師像 己本(真言五図一具)

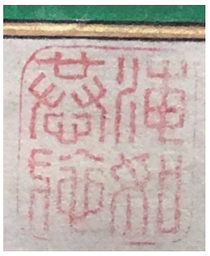
紙本(版本着色) 海如筆(長谷寺の僧)

江戸 天保 5 年(1834) 版本利用
本紙 60.8×28.0

57　不動明王像 乙本(真言五図一具)

紙本(版本着色) 海如筆(長谷寺の僧)

江戸 天保 5 年(1834) 版本利用
本紙 60.9×28.1



朱文隅円方印
縦 2.0×横 1.8

※上の隅円の朱文方印は不動明王 乙本(真言五図)の瑟々座の直下に押されている。　同じ朱文方印は、両部種子曼荼羅図 丁本を除く如意輪観音像 甲本・弘法大師像 己本・理源大師像 乙本など真言五図に押される。

58　両部種子曼荼羅図 丁本(真言五図一具)
紙本(版本) 海如筆(長谷寺の僧)

「奉為弘法大師一千年忌法楽恭写
両部法曼荼一千張之中第九百八
十九豊山比丘海如拜」

※「豊山」は、現在奈良県桜井市にある真言宗豊山派総本山長谷寺のことである。「真言五図」を制作した「海如」は、長谷寺の僧で、天保五年(1834)の弘法大師一千年忌に際して制作した。海如は、京都六角堂能満院の憲海(大願)の弟子で、高貴寺の慈雲の遺訓を継ぐ。

江戸　天保5年(1834)　版本利用
本紙 64.0×29.2

59　理源大師像 乙本(真言五図一具)
紙本(版本着色) 海如筆(長谷寺の僧)

江戸　天保5年(1834)　版本利用
本紙 60.6×28.2

60　釈迦三尊十六善神像　絹本　長谷川等叔 筆

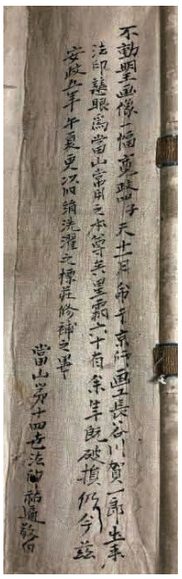
※天保五年(1834)に長谷川等叔によって描かれた愛宕権現曼荼羅の図像に酷似し、表装も同じであることから、同じ年に等叔によって描かれたのだろう。
※「久昭公」＝豊後国岡領十二代領主中川久昭（明治二十二年死去）

江戸　天保5年(1834)頃ヵ
本紙 117.6×60.2

61　薬師十二神将像　絹本

江戸　本紙 94.8×42.6

62　不動明王像 甲本　絹本　長谷川等叔筆



江戸 寛政 4 年(1792)　本紙 59.6×32.0

※寛政四年(1792)、長谷川賀一郎(等叔)が不動明王像を描き、以後願成院十世慧眼が常用の本尊としたことが記される。その後、傷みがひどくなり、安政五年(1858)に修復したことを十四世祐遍が記す。

63　十三仏来迎図 甲本　紙本

※中廻し・中柱・一文字・本紙の彩色は、同一の紙に印刷

近代 19C 後～20C 本紙 76.0×35.8

64　弥勒菩薩像　絹本

※本像の弥勒菩薩像は、手に五輪塔を持つ。

江戸 本紙 縦 72.5×横 37.8

65 兜率天曼荼羅図 甲本　紙本

※表装裏に「兜率曼荼羅一幅
　十四世祐遍欽識」とある。
※祐遍は、幕末から明治初頭の
　願成院住職。

江戸 19C 前
本紙　縦 52.5×横 50.3

66 兜率天曼荼羅図 乙本　絹本　長谷川賀一郎等叔 筆

江戸　文政 12 年(1829)　本紙 縦 121.2×横 126.6

※智積院(寺号：根来寺)は京都に
　ある真言宗智山派の総本山

67 観音菩薩来迎図　絹本

江戸　本紙　縦 99.0×横 39.0

68 五字文殊菩薩像　絹本

※この「五字文殊菩薩像」は、69「如意輪観音菩薩像」の箱書きにある五字文殊菩薩像に相当するものではない。如意輪観音像との作行が違うことが理由。

江戸　本紙　縦 96.0×横 37.6

69 如意輪観音尊像　甲本
絹本　松平近儔筆

江戸　寛政 6 年(1794)
本紙 83.0×33.6

《如意輪観音尊像　甲本が納入されていた箱の箱書》

※内箱（小箱）と外箱の筆跡が違っている。外箱の筆者は、内容から府内城大手門前に所在した祈禱寺：福寿院の住職了義である。また内容によると、描いたのは府内領主松平近儔である。なお五字文殊菩薩像の内箱に、仏画は入っていなかった。

70 准胝観音菩薩像　紙本版下着色

※塗りつぶされた「天徳」は、現在の豊後大野市緒方町にある天徳寺のことヵ。

※京師北村氏筆

江戸 弘化 4 年(1847) 本紙 133.5×64.0

71 普賢延命菩薩像（普賢延命菩薩像・紺紙金泥両部種子曼荼羅図一具）紙本

明治 31 年(1898) 本紙 63.8×29.4

72 紺紙金泥両部種子曼荼羅図(普賢延命菩薩像･紺紙金泥両部種子曼荼羅図一具)

《普賢延命菩薩像･紺紙金泥両部種子曼荼羅図一具》の箱書

※明治三十一(1898)年に願成院第十五世禎僊とあるが、前後の年は金剛智道(智幢･知道)が願成院と観音寺の住職を務めている。また十四世祐遍と禎僊との間に少なくとも三人の願成院住職がいるので、「十五世」は、禎僊の勘違いであろう。すぐに金剛智道が、住職に復帰しているようなので、高齢な禎僊は臨時的な住職だったのだろう。明治初頭に廃院となった大勝院の十六世が禎仙で、171に記載の理由から禎僊と同一人物である。この頃は高齢だったのだろう。

明治 31 年(1847) 本紙 64.0×29.6

73　虚空蔵菩薩像 甲本
絹本　森田重三郎易信筆

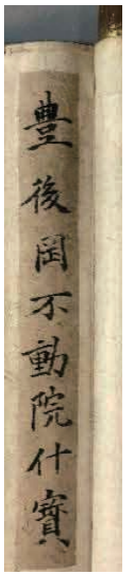
江戸 安政6年(1859) 本紙 92.2×44.0

74　虚空蔵菩薩像 乙本　紙本

江戸　本紙 90.8×43.1

《方印の規模》
朱文方印　縦 5.2 cm×横 2.8 cm
※絵師は、「森田重三郎易信」である。森田は豊山(長谷寺)御絵所を称していた京の絵師。

75　五大明王像 甲本　絹本



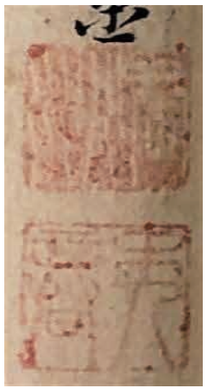
室町 15C 本紙 115.2×58.0

※明治初頭に廃院になった不動院が所蔵し、
その後願成院に移管。

76　五大明王像 乙本　絹本

長谷川賀一等鶴 筆
江戸 18C 末～19C 初 本紙 102.6×52.2
※表装裏の落款は、長谷川賀一等鶴の筆であることを示している。
《五大明王像 乙本》方印・箱書の続き

《印影の規模》
白文方印
縦 2.2×横 2.2
朱文方印
縦 2.2×横 2.3
※「久持公」は、豊後国岡領の第九代領主中川久持
寛政二年（1790）に家督を継承し、寛政十年(1798)九月に死去



77　五大力吼菩薩像 甲本　絹本

江戸　本紙 117.8×58.0

78　五大力吼菩薩像 乙本　絹本

江戸　本紙 104.2×46.6

79　不空羂索忿怒王二童子像　紙本　京師 北村氏 筆

※『密教大辞典』には、「不空憤怒王」の名前で出ており、不空羂索観音の教令輪身という。また不空羂索経や不空羂索陀羅尼経を所依の経典としている。像容は一面四臂であるという。箱書の筆跡は、極短期間、住職を勤めた禎僊(禎仙)の追記である。

明治 23 年(1890)　本紙 91.6×46.4

80　不動明王像 丙本　絹本　豊山 海如 筆

※「真言五図」を構成する「五十七不動明王像　乙本」に作風が同一であり、同本を描いた海如の筆と考える。海如は豊山長谷寺の僧である。

江戸 天保年間 19C 第 2 四半期　本紙 45.2×21.2

81　毘沙門天像(十二天像 丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)　本紙 97.8×37.8

82　風天像(十二天像 丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)
本紙 98.0×37.7

83　地天像(十二天像 丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)
本紙 97.7×37.6

84　日天像(十二天像 丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)
本紙 97.7×37.8

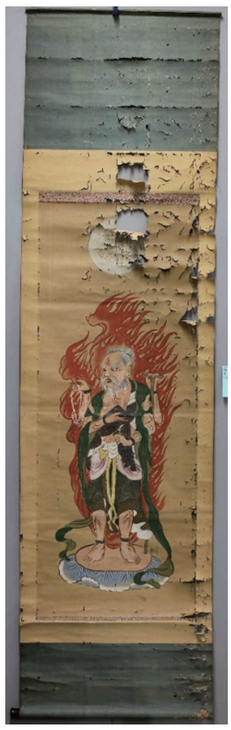
85　伊舎那天像(十二天像丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)
本紙 97.7×38.0

86　帝釈天像(十二天像丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆

江戸 文化 9 年(1812)
本紙 97.8×37.7

87　火天像(十二天像丙本)
紙本　大勝院十二世 了遍 筆



江戸 文化 9 年(1812)
本紙 98.0×37.8

88　水天像（十二天像　丙本）
紙本　大勝院十二世　了遍　筆

江戸　文化９年（1812）
本紙 97.9×37.8

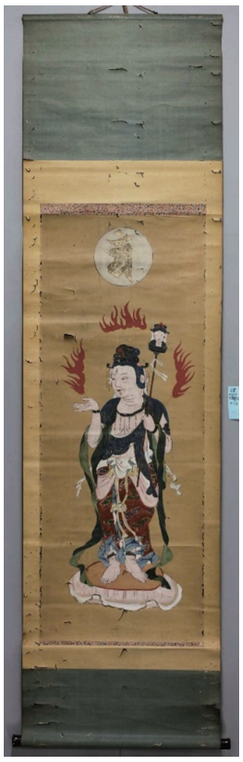
89　羅刹天像（十二天像　丙本）
紙本　大勝院十二世　了遍　筆

江戸　文化９年（1812）
本紙 97.6×37.9

90　月天像（十二天像　丙本）
紙本　大勝院十二世　了遍　筆

江戸　文化９年（1812）
本紙 97.7×37.7

91　焔摩天像（十二天像　丙本）
紙本　大勝院十二世　了遍　筆



江戸　文化９年（1812）
本紙 97.9×37.7

92　梵天像（十二天像　丙本）　紙本　大勝院十二世　了遍　筆

江戸　文化９年（1812）
本紙 98.0×37.9

《十二天像　丙本》箱書

※「掛物箱　大勝院」は、大勝院の什物として描かれたことを示す。

※「文化九申年五月　了遍造之」は、文化九年（1812）に大勝院十二世了遍が描いたことを示す。図像の特徴から手本にしたのは、府内領主松平長門守近儔が描いた十二天像乙本（写真 158～169）である。

93　赤不動像　　絹本

本紙 116.5×43.6

94　矜羯羅童子像　絹本
（不動明王二童子像　三幅一具）

本紙 91.5×37.2

95　不動明王像　絹本
（不動明王二童子像　三幅一具）

本紙 91.8×37.3

96　制多迦童子像　　絹本
（不動明王二童子像　三幅一具）

本紙 92.0×37.0
※94･95･96 は三幅一具の水墨画である。

97　玄奘三蔵像　絹本　金剛智道 筆ヵ

明治 19C 中後　本紙 89.0×33.0

※表装にある「金剛幢智道」（智憧または、知道とも）は、観音寺（愛染堂の前方に隣接）の住職月鑑の養子となり、明治十四年（1881）中に願成院の住職を兼帯するようになる。したがって本像は 1881 年以降の住職在任中に入手もしくは智道自身が作画したのだろう。なお、金剛と智道の間に「幢」を入れた名前は本例だけである。

第1章　令和3年度　大分県立埋蔵文化財センターの事業実績

Ⅰ　埋蔵文化財保護行政の中核的役割を担う

１　発掘調査の推進

県事業関係の発掘調査は、濱田遺跡、小路遺跡、戸室台遺跡、法恩寺石切場跡、下郡遺跡群、府内城･城下町跡の7件の本調査を実施した。

また、分布調査は県土木建築部事業で637件、県農林水産部事業関係で134件であった。試掘・確認調査は63件実施した。

（１）本調査（７件）

第１表　県事業関係本調査箇所

	事業主	事業名	遺跡名等	所在地	調査期間	調査面積	調査担当	主な時代	主な遺構・遺物
1	中津土木事務所	都市計画道路外馬場錆矢堂線街路改良事業	濱田遺跡	中津市	4月21日～6月11日	420㎡	植田紘正	中世	水田層
2	大分土木事務所	上小原地区急傾斜地崩壊対策事業	小路遺跡	由布市	4月20日～7月2日	80㎡	小堀嵩史	近世～近代	岩窟、石塔 陶磁器
3	臼杵土木事務所	双葉南地区急傾斜地崩壊対策事業	戸室台遺跡	臼杵市	9月27日～10月13日	21㎡	横澤　慈	近世～近代	石切場 刻印、刻銘 陶磁器
4	日田土木事務所	法恩寺地区急傾斜地崩壊対策事業	法恩寺石切場跡	日田市	9月30日～10月20日	100㎡	横澤　慈	近世～近代	石切場 祠跡、刻銘 陶磁器
5	県有財産経営室	荷揚町広場整備工事	府内城･城下町	大分市	10月4日～11月15日	280㎡	諸岡初音 横澤　慈	近世	廃棄土坑、瓦溜り 陶磁器、瓦
6	大分土木事務所	都市計画道路庄の原佐野線街路改良事業	下郡遺跡群	大分市	11月16日～2月4日	470㎡	諸岡初音	弥生～近世	井戸、溝、土坑 土器、陶磁器
7	大分土木事務所	197号歩道改良事業	府内城･城下町	大分市	12月6日～3月8日	273㎡	植田紘正	近世～近代	石垣 陶磁器、瓦

（２）分布･試掘･確認調査（約 847 件）

第２表　分布･試掘･確認調査件数

	区　分	調査件数	期　間	調査担当	備　考
1	県土木建築部事業分布調査	637	令和4年3月	横澤他	
2	県土木建築部他事業試掘・確認調査	47	令和3年4月～令和4年3月	横澤他	要本調査4件
3	県農林水産部事業分布調査	134	令和3年11月～令和4年2月	植田他	
4	その他県事業試掘・確認調査	7	令和3年4月～令和4年7月	諸岡他	要本調査1件
5	近世重要遺跡詳細分布調査	10	令和3年4月～令和4年3月	小堀他	
6	九州大学病院別府病院試掘調査	1	8月5日	吉田他	本調査なし
7	国道 57 号竹田阿蘇道路確認調査	3	9月1日～3日	吉田他	本調査なし
8	玖珠駐屯地浄化槽整備確認調査	1	9月7日～8日	吉田寛	要本調査

第３表　分布･試掘･確認調査件数　２

	区　分	調査件数	期　間	調査担当	備　考
9	国道 10 号高江拡幅試掘調査	1	9月28日	吉田寛	本調査なし
10	国道 57 号竹田阿蘇道路確認調査	1	10月5日～6日	吉田寛	本調査なし
11	大分森林監督署敷地調査立会調査	1	11月9日～15日	吉田寛	本調査なし
12	国道 10 号錦町地区電線共同溝確認調査	1	11月17日～12月9日	服部他	本調査なし
13	国道 57 号竹田阿蘇道路確認調査	1	12月21日～24日	服部他	要本調査
14	国道 10 号簡易パーキング整備試掘調査	1	令和4年2月1～3日	小堀他	本調査なし
15	中津連絡所撤去事業立会調査	1	令和4年2月16日	小堀他	本調査なし

（３）整理･報告書等

発掘作業に係る遺物の整理作業を継続して行い、その調査報告書として『大肥吉竹遺跡』、『宮ノ下遺跡・岡山遺跡』の県事業関係2冊及び『調査概報』、『研究紀要』を刊行した。

第４表　令和３年度に刊行した印刷物

	報告書番号	遺跡名等	副題等	担当者	総頁数
1	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第22集	大肥吉竹遺跡	大肥川河川災害復旧等関連緊急良川業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	植田紘正	A4 版 42頁
2	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第23集	宮ノ下遺跡･岡山遺跡	一般国道 212 号三光本耶馬渓道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	植田紘正	A4 版 16頁
3	大分県内遺跡発掘調査概報 25			横澤慈	A4 版 34 頁
4	大分県立埋蔵文化財センター研究紀要第5集			松本他	A4 版 92 頁

（４）所蔵資料の活用

県立埋蔵文化財センターとして、昨年度同様、約30件の資料･写真貸出、資料調査の対応を行った。

① 所蔵資料の貸出し

第５表　所蔵資料貸出し

	貸出機関	期 間	内 容
1	株式会社イビソク大分支店	4月19日～28日	弥生土器2点ほか 社内研修　貸出し
2	大分県立博物館	4月26日～6月27日	北ノ後遺跡弥生土器、浜遺跡弥生土器等の写真　貸出し 企画展「れきはくコレクション 2021」
3	文化庁	5月6日～1月31日	四日市遺跡出土線刻絵画土器、大型筒形器台、甕、脚付注口土器等　貸出し 「発掘された日本列島2021」展
4	佐賀大学芸術地域デザイン学部	5月26日	四日市遺跡遠景、四日市遺跡大型掘立建物、線刻絵画土器の写真　貸出し 「季刊韓国の考古学」に掲載
5	豊後大野市教育委員会	6月24日～12月28日	夏足原遺跡出土甕、田村遺跡出土深鉢、加原遺跡出土土師器　貸出し 複製作成
6	中津市歴史博物館	8月16日～3月31日	定留鬼塚遺跡出土皮袋型須恵器　貸出し 「見つめなおそう中津の自然」展
7	宮崎県立西都原考古博物館	9月28日～12月27日	下郡桑苗遺跡弥生土器、木製品、ブタ・イノシシ類の獣骨等　貸出し 「国際交流展イノシシと人間」展

第６表　所蔵資料の貸出　２

	貸出機関	期 間	内 容
8	大分県立歴史博物館	10月1日～12月17日	岩金遺跡・下原古墳・立野古墳出土品　貸出し 企画展「赤塚古墳と三角縁神獣鏡」展
9	津久見市教育委員会	10月29日～1月30日	志手町遺跡出土遺物　貸出し 図書館企画展「津久見市の文化財」展
10	株式会社　国書刊行会	11月12日	尾畑遺跡出土注口土器の写真　貸出し 「今、 見に行く1000の縄文土器と土偶、 それから石器。」掲載
11	日田市立博物館	11月13日～1月30日	中世大友府内町跡鍛冶工房跡、 井戸跡、 出土鉄製農具の写真等　貸出し 「令和3年度企画展」
12	天草市	12月3日～2月28日	タイ　ソントー鉱山の鉛インゴット鋳型（レプリカ）　貸出し 天草市立天草コレジヨ館「Amacusaと九州西岸のNAMBAN」展
13	日田市教育委員会	12月21日	「大分の装飾古墳」掲載画像写真　貸出し 「史跡ガランドヤ古墳ガイダンス施設及び日田市埋蔵文化財センターのパネル　掲載
14	中津市歴史博物館	12月22日	植野伽藍遺跡土塁断面、 佐知遺跡17号遺構の写真 貸出し 「中津市の中近世城館Ⅱ」掲載和元年度特別展に展示
15	大分県立博物館	1月28日	県道万田四日市線発掘調査写真　貸出し 「中津市沖代条里の歴史と文化」展
16	大分県立博物館	1月31日	県道万田四日市線発掘調査写真　貸出し 「中津市沖代条里の歴史と文化」展
17	株式会社　雄山閣	2月4日	中世大友府内町跡出土獣骨の写真　貸出し 「季刊考古学」 掲載
18	一般財団法人　不審庵	2月4日	中世大友府内町跡出土備前焼皿実測図　貸出し 「茶の湯研究　和比」 掲載

② 所蔵資料の利用

第７表　所蔵資料の利用

	利用機関	日　時	内 容
1	東京大学大学院生	10月21日	蒋山万寿寺跡出土京都系土師器、 瓦質土器の閲覧、 実測 近世武家儀礼成立の考古学的研究
2	九州大学埋蔵文化財調査室	11月4日	夏足原遺跡、 杉園遺跡、 飯田二反田遺跡出土の縄文土器の観察、 実測、 拓本、 写真撮影
3	九州国立博物館	11月12日	中世大友府内町跡土製地蔵菩薩坐像の観察、 実測、 写真撮影

Ⅱ わかりやすい展示、楽しく学べる歴史体験

（１）常設展示

① 豊の国考古館

大分県内で出土した発掘資料を基に旧石器時代から近世にいたる展示をすることで、大分県の通史を学ぶ。

② ＢＶＮＧＯ大友資料館

中世大友府内町跡出土品を中心とした豊富な発掘資料の展示をすることで、戦国大名大友氏について学ぶ。

（２）企画展示

春先の『学校の遺跡展』から3月の『豊の古代瓦展』まで、年間5回の企画展を開催した。

① 企画展１

『学校の遺跡展』

令和3年4月1日（土）～5月30日（日）
開催期日　52日
入館者数　634名
多くの学校は地域の中核となる位置にあるため、遺跡の上に建つ学校も少なくない。本企画展では、そうした学校の足下に眠っている遺跡から発掘された資料を中心に紹介した。
（主な展示資料）
大分雄城台高校・・雄城台遺跡（弥生時代）
大分鶴崎高校・・鶴崎御茶屋跡（中世）
中津南高校・・高畑遺跡（古墳時代ほか）

② 企画展２

「食卓の考古学」

令和3年7月13日（火）～9月26日（日）
開催期日　66日
入館者数　1,485名
本展では、食文化を現代から先史時代までさかのぼって、食にまつわる4つのテーマでみていった。まずは「食器の旅へのご案内」、次に「調理の旅へのご案内」、続いて「道具の旅へのご案内」、最後に「食される物の旅へのご案内」という内容でご紹介し、多様で食を大切にする日本の文化を俯瞰した。
（主な展示資料）
横尾遺跡出土ハマグリ
飯田二反田遺跡出土縄文土器
龍頭遺跡出土網袋
下郡桑苗遺跡出土のブタ頭骨

③ 企画展３

『大分のもののふ』

令和3年10月23日（土）～12月12日（日）
開催期日　56日
入館者数　1,406 名
開館5周年記念企画展として開催。 大分県下のもののふに関する出土品や伝世品、 鎌倉市出土遺物や松浦市鷹島海底遺跡の海底から引き上げられた遺物などを展示し、 大友宗麟が活躍した以前に焦点をあて紹介した。 この展示は「子ども学芸員体験事業」としても行われ、 地域の歴史・文化を次世代に繋いでいく担い手である児童・生徒たちが、 地域のもののふの歴史を学び、 展示・解説を行った。
（子ども学芸員参加校）
　豊後大野市立緒方中学校
　宇佐市立佐田小学校
　玖珠町立八幡小学校

④ 企画展４

『粉砕の考古学』

令和4年1月12日（水）～2月27日（日）
開催期日　41日
入館者数　610名
人々は石皿、 擂鉢、 挽き臼などの道具を用いて、 様々なものを砕いて粉にして、 自らの生活に役立てた。 本企画展ではその歴史を辿っていった。

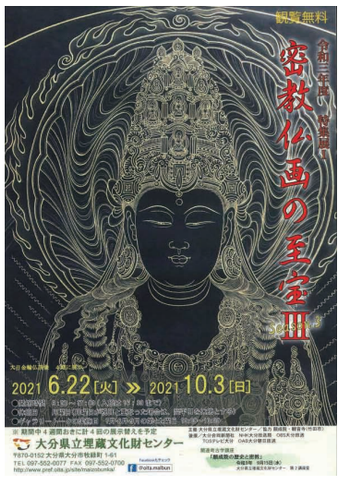
⑤ 企画展５

『豊の古代瓦』

令和4年３月23日（火）～3月31日（木）
開催期日　8日（3 月 31 日まで）
入館者数　136名
今から 1300 年ほど前、 宇佐地域などにも塔や金堂がある寺院が現れ、 屋根には様々な文様を施した瓦が使われるようになった。 瓦は建物を風雨から守る建築材だが、 古代においては宮殿や寺院の建物を壮麗に飾る道具でもあり、 地域の支配者や有力者の権威の象徴だった。
今企画展では、 大分県の遺跡から出土した古代瓦を紹介し、 瓦に施された様々な文様を楽しんでいただくとともに、 その背景にある歴史的意義を検討する。
（主な展示資料）
　単弁八葉軒丸瓦　相原廃寺跡　大分県立博物館蔵
　新羅系複弁八葉軒丸瓦　塔ノ熊廃寺跡　中津市教育委員会
　川原寺系複弁七葉軒丸瓦　虚空蔵寺跡　個人蔵
　鴻臚館系複弁八葉軒丸瓦　弥勒寺跡　大分県立歴史博物館蔵
　せん仏　虚空蔵寺跡　教覚寺蔵　宇佐市指定有形文化財

（３）特集展示

企画展と併行しながら年間2回、特集展示を開催した。



① 特集展示１
「密教仏画の至宝Ⅲ」

令和3年6月22日（火）～10月3日（日）

願成院は、岡藩の藩主であった中川氏により建てられた領内七万石の祈祷所だった。明治時代はじめの神仏分離令など苦難の時代を歩んできた願成院には、歴代の住職により伝えられてきた大量の寺宝がある。その一部について、「密教仏画の至宝」として展示し、好評を博したことから、今回は人々に広く信仰された釈迦如来や観音菩薩などの仏画を展示した。

（展示構成）

1期　観音への信仰　6 月 22 日（火）～ 7 月11日（日）
2期　方角を護る　7 月 13 日（火）～ 8 月 9 日（月）
3期　釈迦への信仰　8月 11 日（水）～ 9 月 5 日（日）
4期　仏は細部に宿る　9月 7 日（火）～10月 3 日（日）

② 特集展示２
「願成院愛染堂の秘宝Ⅱ」

令和4年1月12日（火）～3月27日（日）

竹田市にある願成院は江戸時代初期に建てられた真言宗寺院で、江戸時代をとおして岡藩中川家の祈祷所として保護されてきた。ここに伝わる貴重な密教法具、仏具、仏像を展示し、近世密教の一端を紹介した。

（４）歴史体験学習

歴史体験をとおして古代人の知恵を知り、生きる力をはぐくむための体験学習を、毎日実施している。子どもたちは古代人になりきって、勾玉や土器作り、火おこし、組紐作りなどをを学習している。今年は約 600 人が体験をとおして歴史を楽しく学んだ。

第８表　歴史体験学習一覧

	期 日	内 容	参加者
1	勾玉製作	加工しやすい石（ろう石）を用いて、金やすりや紙やすりなどを使い、勾玉を製作する。今年から石の色を2種類とした。（白色とピンク色）	163名
2	犬形土製品製作	乾燥しやすいハニワ粘土を用いて。中世大友府内町跡の発掘調査で出土する犬形土製品を製作する。	61名
3	ミニ瓦製作	「瓦の製作工程を学ぶため、瓦の模様を入れた型に特殊な粘土を押し込み、ミニ瓦を製作する。	19名
4	古代機織り体験	簡易型の機織り機と毛糸を用いて、コースターや小形マットを製作する。	56名
5	組紐体験	刺繍糸 3 本もしくは 5 本を使い、自らの指先の動きで糸を組み上げ紐を製作する。	36名
6	火おこし体験	簡易な火おこし機（舞きり技法）を使い、藁に火をつける体験をする。	62名
7	鋳造体験	貨幣や巴型銅器、銅鐸などの鋳型に、低温度で溶ける金属を流し込み、製品を作る鋳造体験を行う。	113名
8	土器製作	陶芸用粘土を用いて、小形の縄文土器や弥生土器を製作し、乾燥後体験学習館に設置している電気窯で焼き上げる。今年から「土偶制作」を追加した。	46名

Ⅲ 教育普及の充実

（１）講演会・講座

講師に國學院大学教授の池田榮史氏や名古屋学院大学教授の鹿毛敏夫氏をむかえて開催した「もののふの実像～蒙古襲来と大友氏の黎明～」をはじめ2回の埋文講演会を行った。 そのほか考古学講座を4回、 児童・生徒を対象とした特別講座を1回開催した。

① 埋文講演会１
「躍動するもののふ」

令和3年11月3日（水）
大分市民公園能楽堂　参加者215名
開館5周年記念企画展「大分のもののふ」関連の講演会、 講師に別府大学学長の飯沼賢司氏をむかえて開催した。 県内の児童生徒が「もののふ」について調べたことを「子ども学芸員」として発表した。
（子ども学芸員発表）
豊後大野市立緒方中学校2年生
玖珠町立八幡小学校6年生
宇佐市立佐田小学校4・5年生

② 埋文講演会２
「もののふの実像　～蒙古襲来と大友氏の黎明～」

令和3年11月28日（土）
大分市民公園能楽堂　参加者82名
企画展「大分のもののふ」関連の講演会、 國學院大学教授の池田榮史氏ならびに名古屋学院大学教授の鹿毛敏夫氏を講師に迎え、 講演会を開催した。

（２）考古学講座

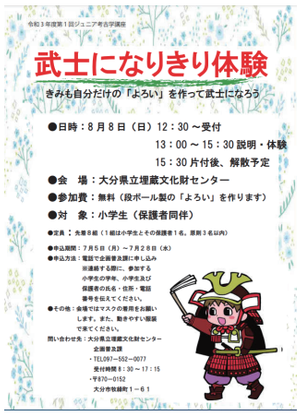
埋文センター職員が講師を務める講座を毎月実施し、 約60名の方が聴講した。 特別講座がある月は、 それを考古学講座に代えて実施した。

第９表　考古学講座一覧

	期 日	演 題	講 師	会 場	参加者
1	中止	「学校の遺跡」	横澤慈（調査第一課）	埋文センター第2講座室	
2	中止	「令和2年度災発掘調査の成果」	調査第一課・調査第二課職員	埋文センター第2講座室	
3	7月21日（水）	「食卓の考古学」	土谷崇夫（企画普及課）	埋文センター第2講座室	35名
4	9月15日（水）	「願成院の歴史と密教」	綿貫俊一（企画普及課）	埋文センター第2講座室	47名
5	12月16日（水）	「風土記の丘からみた古墳時代」	越智淳平氏（大分県立歴史博物館）	埋文センター第2講座室	40名
6	1月19日（水）	「粉砕の考古学」	植田紘正（調査第一課）	埋文センター第2講座室	32名
7	中止	「願成院愛染堂の歴史と密教」	後藤幸雄師（愛宕山願成院住職）	埋文センター第2講座室	

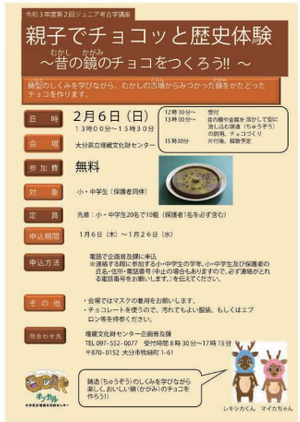
（３）特別講座

児童・生徒を対象としたジュニア考古学講座で、考古資料に直接触れながら考古学について学ぶことで、考古学や郷土の歴史に興味を持ってもらうことを目的に年2回開催している。しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染症の予防のため、第2回の講座は中止となった。



① 特別講座１
「武士になりきり体験」

令和3年8月8日（日）
第2講座室・豊の国考古館ほか　参加者22名
武士の代名詞ともいえる「よろい・かぶと」を作る。段ボール製とはいえ、できあがりは結構本格的。これを身につければ、あな令和たも立派な武士になれる。



② 特別講座２
「鋳造体験」

令和3年2月6日（日）
第1講座室・歴史体験学習館ほか
弥生時代から江戸時代までの鏡について勉強をした後に、チョコレートを使った鋳造体験をします。「モノ」を作るための知恵について学べる楽しい講座となっている。

武士になりきって記念撮影

（４）ボランティア養成講座

埋蔵文化財センターの移転拡充にともない、応募をはじめたボランティアの養成も6年目をむかえ、修了した22名の方が図書整理や歴史体験指導等に活躍いただいている。今年も9回の養成講座を計画したが、新型コロナウィルスの感染拡大により、下の5回の実施にとどまった。

第 10 表　ボランティア養成講座一覧

	期 日	研修内容	会 場	参加者
1	8月15日（水）	「開講式・ボランティア活動について」 「常設展示見学」	埋文センター 第1講座室・展示室	10名
2	9月15日（水）	「考古学講座受講」	埋文センター 第2講座室	5名
3	11月3日（水）	「埋文講演会受講」	大分平和市民公園能楽堂	4名
4	11月28日（土）	「埋文講演会受講」	大分平和市民公園能楽堂	6名
5	12月16日（水）	「考古学講座受講」	埋文センター 第2講座室	10名

Ⅳ 連携の強化（学校・地域等）

（１）学校との連携

小中学校の社会科見学や授業で当センターを多く活用いただいた。また、高等学校のキャリアフォーラムや大学生のインターンシップ及び実習等将来の進路に関する生徒・学生の受入れも行った。

① 職場体験・インターンシップ受入れ

高校生を対象としたキャリアフォーラムのほか、今年初めて大学生の博物館実習の受入れを行った。また、県庁でのインターンシップの一環で、当センターでも2名の大学生の研修を実施した。

第 11 表　職場体験・インターンシップ受入れ一覧

	項 目	期 日	学校名等	参加者
1	インターンシップ	9月13日～17日	別府大学	1名
2	博物館実習	7月5日～9日	西南学院大学	1名
3	キャリアフォーラム	8月4日	大分県下高校生	12名

② 授業・社会科見学・修学旅行等の受入れ

特別支援学校の生徒が歴史体験の授業を当センターで実施した。また、小学校の出前授業に職員を派遣した。そのほか3校の小中学校が社会科見学で展示見学や歴史体験を行った。

第 12 表　授業・社会科見学・修学旅行等受入れ一覧

	項 目	期 日	学校名等	参加者
1	社会科見学	10月15日	由布市湯布院町小学校連合	67名
2	社会科見学	10月22日	国東市立安岐小学校	35名
3	授業	11月18日	大分大学附属特別支援中等部	30名
4	社会科見学	7月8日	豊後大野市立朝地中学校	19名
5	出前授業	6月15日	大分市立碩田学園6年	134名

③ その他教育団体等の受入れ

小・中学校教員団体が見学・歴史体験等で活用いただいた。そのほか県教育センターの実施する教員研修も当センターで実施した。

第 13 表　その他教育団体等の受入れ一覧

	項 目	期 日	学校名等	参加者
1	学校関係団体	4月28日	大分県高等学校文化連盟美術部会	10名
2	学校関係団体	5月29日	大分県高等学校文化連盟美術部会	20名
3	学校関係団体	7月10日	大分県高等学校文化連盟美術部会	125名
4	学校関係団体	8月7日	大分県高等学校文化連盟美術部会	
5	教員研修	8月9日	小学校・特別支援学校美術等教員対象の研修	7名
6	歴史学習体験キット	4月～3月	埋蔵文化財センター所蔵資料から各時代の特徴的な遺物を選出し、学校教育で利用できる学習キットを作成のうえ、貸出しを行う。	

（２）地域との連携

文化財保護団体や社会教育団体等の展示見学、歴史体験等の申込みが34団体あり、その受入れを行った。また社会教育団体等から研修会での講師の要請があり、職員を派遣した。

① 各種団体の展示見学・歴史体験等での受入れ

30を越える団体から展示見学の申込みがあり、なかには見学だけでなく、歴史メニューを体験する団体もあった。

第 14 表　各種団体受入れ一覧

	項 目	期 日	学校名等	参加者
1	見学・会議	4月13日	土木建築部	10名
2	見学・会議	4月19日	文化課市町村関係職員	25名
3	見学・会議	5月20日	特別支援課	30名
4	見学・会議	5月21日	学校安全・安心課	25名
5	見学・会議	5月26日	高等特別支援学校開設準備室	12名
6	見学・会議	6月2日	高等特別支援学校開設準備室	12名
7	見学・会議	6月2日	土木建築部	10名
8	見学・会議	6月3日	高等特別支援学校開設準備室	12名
9	見学・会議	6月10日	鶴崎公民館	20名
10	見学・会議	6月28日	佐伯市史編纂会	15名
11	見学・会議	6月30日	高等特別支援学校開設準備室	12名
12	見学・会議	7月7日	文化課文化財班	17名
13	見学・会議	7月8日	鶴崎公民館	16名
14	見学・会議	7月9日	福利課市町村健康管理職員	26名
15	見学・会議	7月16日	文化課ユネスコ連盟	9名
16	見学・会議	7月16日	佐伯市史編纂会	11名
17	見学・会議	7月29日	文化課市町村関係職員	26名
18	見学・会議	8月19日	鶴崎公民館	17名
19	見学・会議	9月9日	鶴崎公民館	20名
20	見学・会議	10月14日	鶴崎公民館	21名
21	見学	10月14日	佐賀関公民館「学ぼう大分」	9名
22	見学・会議	10月22日	自然保護推進室	15名
23	見学	11月4日	西部公民館主催見学会	20名
24	見学・会議	11月11日	鶴崎公民館	23名
25	見学・会議	11月11日	佐伯市史編纂会	8名
26	見学・会議	11月17日	九州山口ミュージアム会議（文化課）	14名
27	見学・会議	12月9日	鶴崎公民館	22名
28	見学	12月10日	岩手県・岩手大学	4名
29	見学	1月13日	鶴崎公民館	22名
30	見学・会議	2月17日	特別支援課	11名
31	見学・会議	2月17日	学校安全・安心課	20名
32	見学	2月19日	由布市教育委員会	3名
33	見学・会議	2月25日	文化課市町村関係職員	26名
34	見学・会議	3月10日	鶴崎公民館	17名

② 研修会等への講師派遣

各市町村にある歴史団体・公民館等の依頼を受けての歴史に関する講演や地域の子どもたちを対象に歴史体験メニューを実施した。

第 15 表　研修会・講師派遣等一覧

	項 目	期 日	内容	会 場	参加者
1	出前講座	7月21日	公民館講座「学校の遺跡」	敷戸公民館	37名
2	歴史体験	10月30日	宗麟公まつり	大友氏遺跡	20名
3	出前講座	11月23日	OPAM 大分県立美術館での講演	OPAM 大分県立美術館	50名
4	出前講座	12月14日	「古代史の会」での講演	ホルトホール	21名

子ども学芸員体験事業 2021　大分のもののふ

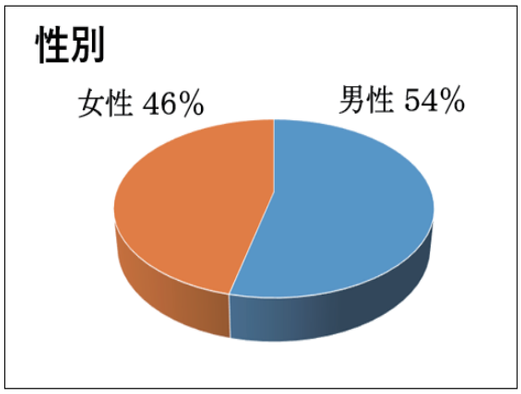
児童生徒の地域の歴史及び文化に対する興味・関心を高め、その理解を深める取組として、「子ども学芸員」体験事業を実施している。子どもたちが「学芸員」となり、身近な地域の歴史や文化を調査研究し、それをとりまとめて展示・発表を行う。この事業をとおして、子どもたちが地域の魅力を再認識し、未来に向けて地域の歴史や文化を支えていくことができるような人材の育成につなげていく。

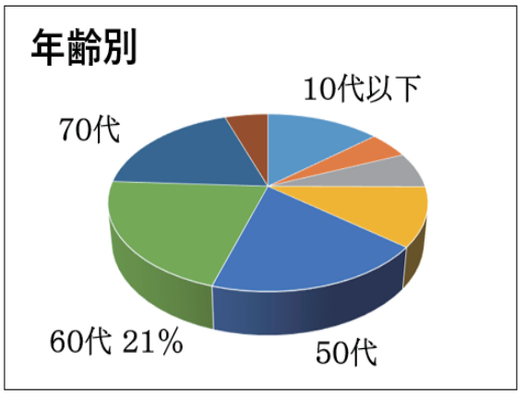
令和3年度は宇佐市立佐田小学校、玖珠町立八幡小学校、豊後大野市立緒方中学校の児童生徒が、地域研究し、それをとりまとめた展示、発表を行った。

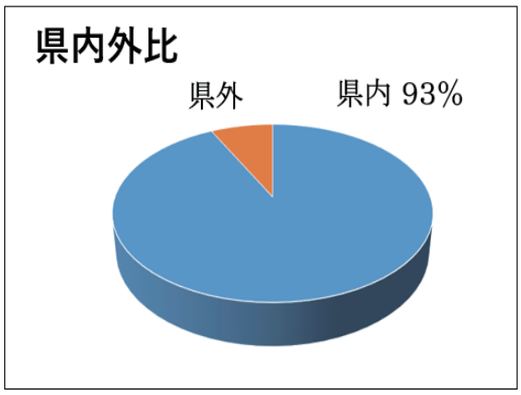
（テーマ）佐田小学校「青山城のひみつを広めよう」
八幡小学校「角牟礼城と八幡のもののふ」
緒方中学校「さぶろう惟榮　おがたの宝」

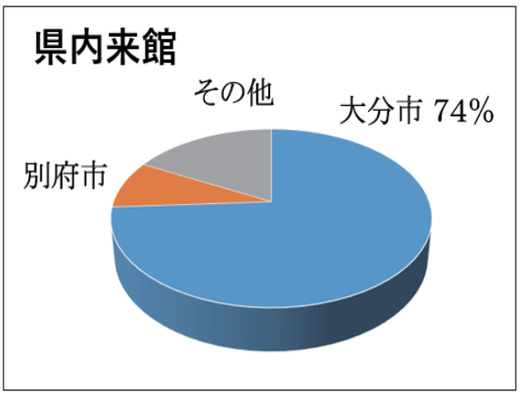
令和３年度　来館者アンケート結果

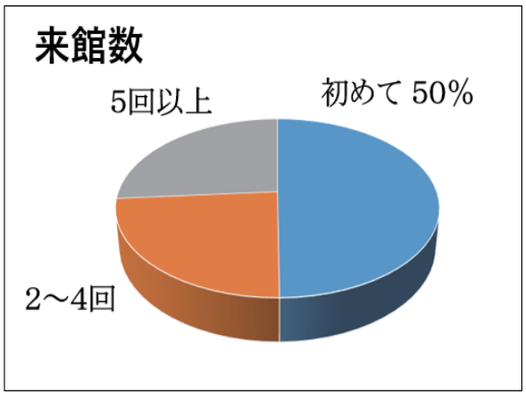
対象期間　令和３年４月１日～令和４年３月３１日
来館者　５，６９３人　　回答者　３０７人　回答率　５．４％

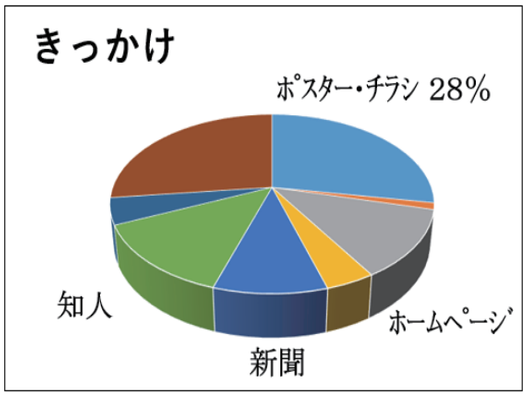


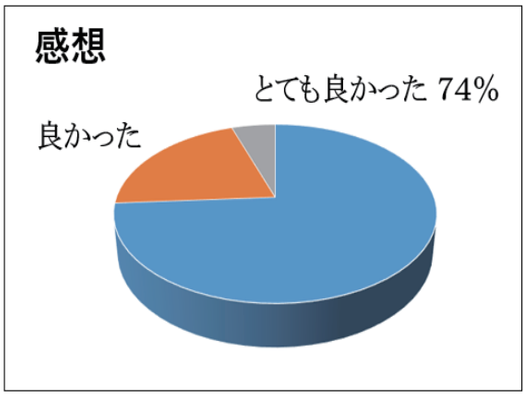












Ⅳ 安心・安全な施設づくり（危機管理向上）

当センターは、「豊の国考古館」、「BVNGO大友資料館」の展示施設や歴史体験館、また発掘調査で出土した重要遺物を保管する収蔵庫を有している。そのため、入館者の安心・安全や文化財の保護を目的とした危機管理能力向上のための研修を年7回実施している。

その研修内容には新日本消防設備職員を講師に迎える初期消火、救命救急訓練、警察署員を講師とする不審者対応実技訓練、地震や火災に対する初動体制の確認等を実施している。

ただ、新型コロナウィルス感染拡大に伴い、考古学講座が中止となり、ボランティアスタッフとの協働での入館者避難誘導については実施できなかった。

第 16 表　安心・安全な施設づくりに向けた研修一覧

	項 目	期 日	目 的	研修講座の内容	講師等	参加者
1	職員防災スキル向上	6月28日	災館内非常機器取扱	館内非常機器説明取扱説明会	新日本消防設備（株）防災システム事業部 松村係長	13名
2	入館者の安心・安全	8月2日	不審者対応	不審者に対する対応・実技指導	大分中央警察署生活安全課　井上氏	13名
3	シェイクアウト訓練	9月1日	災害時の安全確保	館内放送による安全確保への誘導	なし	14名
4	入館者の安心・安全	12月6日	救急救命（心肺蘇生）	救急救命法（胸骨圧迫、AED研修）	大分フクダ電子西部南販売株式会社　大分営業所　梅本氏	13名
5	入館者の安心・安全	12月20日	感染症への対策	文化財館内の衛生管理（新型コロナウィルス、インフルエンザウィルス感染予防研修）	大分労働衛生管理センター　衞藤保健師	11名
6	入館者の安心・安全		災害発生時の避難誘導	「考古学講座」開催中の火災発生に伴うボランティアスタッフを活用した受講生避難誘導 入館者誘導	埋文ボランティアスタッフとの協働	中止
7	文化財保護 入館者の安心・安全	1月31日	文化財保護・入館者誘導	消防防火訓練	新日本消防設備（株）	20名

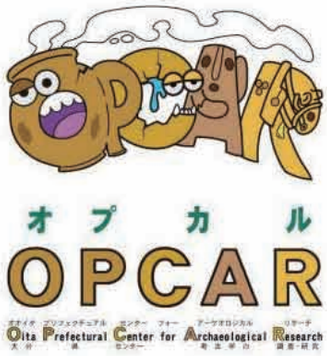
当センターの愛称は「OPCAR」

大分県立埋蔵文化財センター開館5周年にあわせて愛称募集・投票が行われ、愛称は OPCAR（オプカル）に決まった。

OPCAR とは大分県立埋蔵文化財センターの英語表記（Oita Prefectural Center for Archaeological Research）の頭文字からとったもの。

愛称は県民から公募し、集まった愛称案の中から内部選考で絞られた5案について県民投票を行い、決定した。

その愛称に鶴崎工業高校産業デザイン科の生徒がポップなロゴを考案し、令和3年10月23日（土曜日）の開館5周年式典に合わせて発表した。



埋蔵文化財センター要覧

1 沿 革

昭和45年(1970)4月	社会教育課内に文化係設置
昭和46年(1971)4月	文化室(文化財係)設置
昭和47年(1972)4月	文化課設置
昭和53年(1978)6月	大分市舞鶴町に埋蔵文化財資料保管・整理用の作業所設置
昭和56年(1981)4月	文化課に埋蔵文化財係設置
昭和62年(1987)4月	埋蔵文化財第一係・埋蔵文化財第二係の2係体制
平成 9年(1997)4月	舞鶴町の作業所を大分市中判田の工業試験場跡に移転
平成16年(2004)4月	教育庁埋蔵文化財センター設置 総務課・調査第一課・調査第二課の3課体制
平成21年(2009)4月	管理予算班・一般事業班・大型事業班・受託事業班・資料管理班の5班体制
平成26年(2014)4月	管理予算班・県事業班・受託事業班・資料管理班の4班体制
平成27年(2015)8月	旧芸術会館跡地への移転が正式決定
平成29年(2017)2月	旧芸術会館にて業務開始
平成29年(2017)4月	大分県立埋蔵文化財センター発足 総務課・企画調査課・調査第一課・調査第二課の4課体制
令和3年(2021)10月	大分県立埋蔵文化財センター開館5周年記念 愛称は「OPCAR(オプカル)」に決定

2 施設の概要

(1)施設の場所　大分市牧緑町1-61

(2)規模　敷地面積　18,924.64㎡
建築面積　4,345.37㎡
延べ床面積　7,301.98㎡

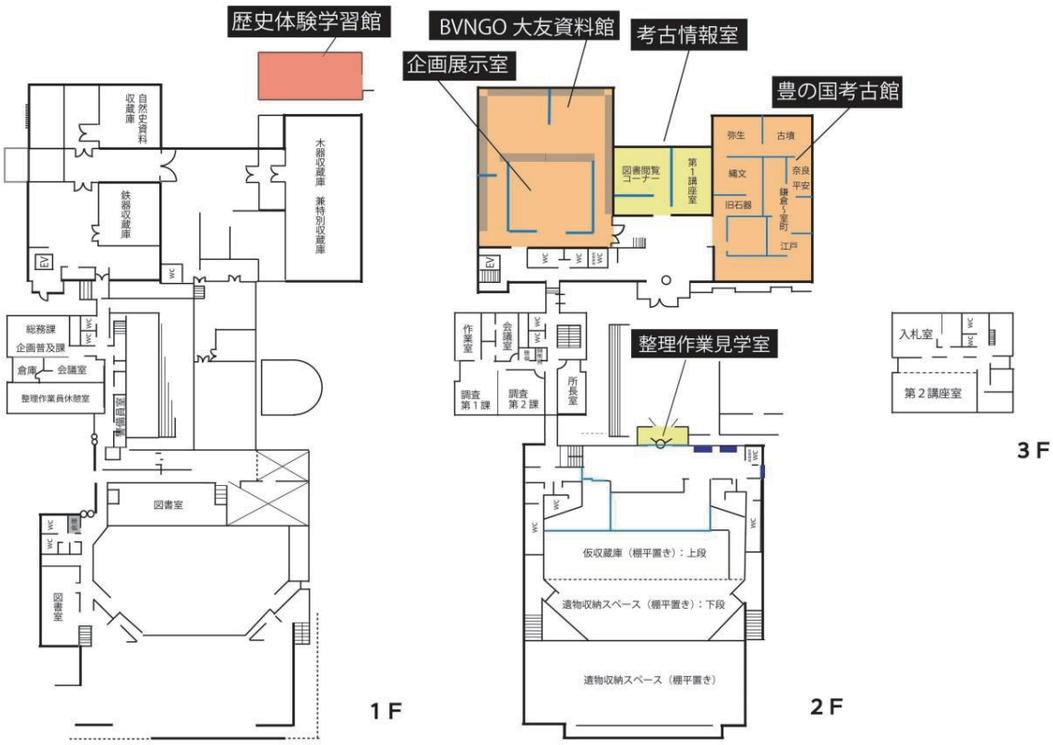
(3)主な施設

① 管理棟(1,404.9㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート3階建
所長室・事務室・第2講座室・入札室・会議室

② 展示棟(3,108.35㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート2階建
豊の国考古館(459.25㎡)
BVNGO大友資料館(599.80㎡)
考古情報室・第1講座室(174.96㎡)

③ 整理収蔵棟(2,629.79㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄骨鉄板3階建
整理作業室・一時保管室・写場・収蔵庫

④ 歴史体験学習館(158.94㎡) 昭和52年(1977)築、鉄骨鉄筋コンクリート1階建



3 利用案内（大分県立埋蔵文化財センター）

（1）開館時間　9:00～17:00（入館は16:30まで）

（2）休館日　年末年始（12/28～1/4）・月曜日

（月曜日が祝日と重なった場合は、翌平日を休館とする）

（3）入館料　無料

（4）交通　**バス**　牧バス停　徒歩3分

古ヶ鶴公民館入口バス停　徒歩3分

JR　牧駅　徒歩5分

車　国道197号を通って、大分駅から10分

駐車場　170台　車いす利用者駐車場・大型車駐車場あり

4 管理規則・利用規則

(1)大分県立埋蔵文化財センター管理規則

平成二十九年四月一日
大分県教育委員会規則第九号

大分県立埋蔵文化財センター管理規則をここに公布する。

大分県立埋蔵文化財センター管理規則

(趣旨)

第一条　この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例(平成二十八年大分県条例第四十五号)第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)の組織、運営その他必要な事項を定めるものとする。

(課の設置)

第二条　センターに、総務課、企画普及課、調査第一課及び調査第二課を置く。

(総務課の分掌事務)

第三条　総務課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一　公印の管守に関すること。
二　文書の収受、発送、編集及び保存に関すること。
三　職員の身分、服務、研修及び福利厚生に関すること。
四　予算の執行並びに現金、有価証券及び物品の出納命令に関すること。
五　関係行政機関及び関係団体との連絡調整に関すること。
六　施設及び設備の維持管理に関すること。
七　施設及び設備の利用に関すること。
八　その他他課の所掌に属さない事項に関すること。

(企画普及課の分掌事務)

第四条　企画普及課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一　出土品その他埋蔵文化財に関する資料の保存及び展示並びに体験学習の実施に関すること。
二　歴史及び考古についての講演会、講習会等の開催に関すること。
三　県民の歴史及び考古に関する調査研究活動を援助すること。
四　学校、図書館、研究所、博物館、資料館、公民館等の諸施設に対する歴史及び考古についての協力及び活動の援助に関すること。
五　埋蔵文化財についての目録、年報、案内書、図録、調査研究の報告書等の刊行に関すること。

(調査第一課の分掌事務)

第五条　調査第一課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一　県が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
二　県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
三　県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(調査第二課の分掌事務)

第六条　調査第二課においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一　国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財保護のための調整に関すること。
二　国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の実施に関すること。
三　国等が行う開発事業に係る埋蔵文化財の調査研究の報告書を作成すること。

(職員の職)

第七条　センターの職員の職として、次の職を置く。

一　所長
二　副所長
三　参事
四　課長
五　課長補佐
六　主幹
七　副主幹
八　主査
九　専門員
十　主任
十一　主事

2　所長の職は、非常勤とすることができる。
3　所長は、上司の命を受け、センターの事務を掌理し、所属職員を指揮監督する。
4　副所長は、所長を補佐し、センターの事務を処理する。
5　参事は、上司の命を受け、専門的事項の指導及び助言に関する事務並びに特定の事務を処理する。
6　課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
7　課長補佐は、上司の命を受け、課の事務を処理する。
8　主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
9　副主幹は、上司の命を受け、特定の事務を処理する。
10　主査は、上司の命を受け、事務を処理する。
11　専門員は、上司の命を受け、事務を処理する。
12　主任は、上司の命を受け、事務に従事する。
13　主事は、上司の命を受け、事務に従事する。

(職員の数)

第八条　センターの職員の数は、教育長が定める。

(委任)

第九条　この規則に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育長が別に定める。

附　則

この規則は、公布の日から施行する。

（2）大分県立埋蔵文化財センター利用規則

平成二十九年四月一日
大分県教育委員会規則第十号

大分県立埋蔵文化財センター利用規則をここに公布する。

大分県立埋蔵文化財センター利用規則

（趣旨）

第一条　この規則は、大分県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例（平成二十八年大分県条例第四十五号）第六条の規定に基づき、大分県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

（利用時間）

第二条　センターの利用時間は、午前九時から午後五時までとする。ただし、入館は午後四時三十分までとする。

2　大分県教育委員会（以下「教育委員会」という。）が、特に必要があると認めるときは、臨時に前項の利用時間を変更することができる。

（休館日）

第三条　センターの休館日は、次のとおりとする。

一　月曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第百七十八号）に規定する休日（以下単に「休日」という。）に当たるときは、その日後において、その日に最も近い休日でない日）

二　十二月二十八日から翌年の一月四日まで（前号に掲げる日を除く。）

2　教育委員会が特に必要があると認めるときは、前項の休館日を変更し、又は臨時に休館日を定めることができる。

（利用制限等）

第四条　所長は、利用者が次の各号のいずれかに該当し、又は該当するおそれがある場合は、その入館を拒否し、若しくは退館を命じ、又は利用を制限し、若しくは利用を停止させることができる。

一　出土品その他埋蔵文化財に関する資料（以下「資料」という。）並びにセンターの施設及び設備を故意に亡失し、汚損し、若しくは毀損し、又はそのおそれがあると認められるとき。

二　資料の返納を故意に怠ったとき。

三　定められた場所以外で喫煙又は飲食したとき。

四　めいていし、大声を発し、若しくは危険物を持ち込む等他の利用者に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがあると認められるとき。

五　その他管理上支障があると認めるとき。

（資料の館外貸出し）

第五条　資料は、館外貸出しを行わないものとする。ただし、所長が特に必要があると認めた場合については、この限りではない。

（委任）

第六条　この規則に定めるもののほか、センターの利用に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附　則

この規則は、公布の日から施行する。

大分県立埋蔵文化財センター　研究紀要6

令和5年3月31日

編集・発行　大分県立埋蔵文化財センター

〒870-0152　大分県大分市牧緑町1-61

電話　097-552-0077

OITA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

BULLETIN

Vol. 6

A Study about the Glass beads of the Ancient Shite Konpirayama Burial Mound Exhumation of Bungotakada City

HATTORI, Masakazu

A Study about the Iron Arrowheads in Kofun Period of Oita 1

NISHI, Takashi

Esoteric Buddhist Paintings owned by Ganjo-in Temple 1

WATANUKI, Shunichi

Archive Annual Report (Fiscal 2022)

Archive Directory

March 2023

AR
大分
2